

<全文>日文研 : 57号

雑誌名	日文研
巻	57
発行年	2016-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1368/00006489/

日文研

2016年9月

no.57

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

A N
HISTORICAL and GEOGRAPHICAL
DESCRIPTION
O F
F O R M O S A,
A N
Island Subject to the Emperor of JAPAN.
G I V I N G

An Account of the Religion, Customs, Manners, &c. of the Inhabitants. Together with a Relation of what happen'd to the Author in his Travels; particularly his Conferences with the *Jesuits*, and others, in several Parts of *Europe*. Also the History and Reasons of his Conversion to Christianity, with his Objections against it (in defence of Paganism) and their Answers.

To which is prefix'd,

A PREFACE in Vindication of himself from the Reflections of a *Jesuit* lately come from *China*, with an Account of what pass'd between them.

By GEORGE PSALMANAZAR,
a Native of the said Island, now in *London*.

Illustrated with several Cuts.

L O N D O N :

Printed for Dan. Brown, at the Black Swan without Temple-Bar; G. Strahan, and W. Davis, in Cornhill; and Fr. n. Cogan, in the Inner-Temple-Lane. 1704.

プサルマナザール『台湾誌』標題紙（ロンドン、1704年刊）

プサルマナザールという人物はイギリスに渡ったフランス人でありながら、台湾人であると偽っていた詐欺師であった。1704年に出版された『台湾誌』においては、題目の通り、主に台湾について記述されているが、その中で台湾人の祖先が日本人であり、台湾が日本の属国であるとされていることから、日本についての記述が多い。プサルマナザールはある程度イエズス会士の報告集を参照したと推測されるが、ほとんどの記述は想像上に成り立ったでっち上げであると言える。しかし、出版当時は、同書の内容を信じ込んだヨーロッパ人が少なくなかったため、詐欺が発覚するまでの数年の間、『台湾誌』はヨーロッパにおける日本像の形成において大きな影響力をもっていた。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス准教授）

日 文 研

— エッセイ —

岡本貴久子 「苦蟲から恵比寿顔に」 — 本多静六の一般社会へのまなざし — 2

周 関 私と日中比較文学の縁 9

グエン・ヴァー・クイン・ニュー 日本が私にもたらした予想外の人生の展開は、

「縁」であり「恩」である 15

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ 京都で舞台芸術における身体を考える 22

セシル・ラリ 空から博物館へ — 一九六〇〜七〇年代の風の愛好者の活動 — 29

李 愛淑 翻訳への思い 36

マティアス・ハイエク 「妖怪ウォッチ」から見える時世 42

ギター・A・キニ タゴールの詩集『ギタンジャリ』と日本 48

入木田浩幸 プログレは終わったのか 55

— センター通信 —

ジョン・ブリーン *Japan Review* 三〇号をむかえて (その二) 58

共同研究 61

基礎領域研究 73

彙報 74

所員活動一覧 83

エッセイ

「苦蟲から恵比寿顔に」―本多静六の一般社会へのまなざし―

岡 本 貴久子

今年三月末、博士論文をもとに日文研叢書『記念植樹と日本近代 林学者本多静六の思想と事績』を出版する機会に恵まれた。その主役・本多静六について、本文に書ききれなかったエピソードを綴ってみたいと思う。

『人生と財産』

『人生と財産』という化粧箱入りの真っ赤な大著が私の手元にある。送って下さったのは、本多の嫡孫の東京大学名誉教授、故・本多健一先生の奥様である。丁重なる御手紙とともに、ずしりと重いその本はこの四月から私の書棚に納まった。博士論文を執筆するにあたり、本多の専門分野に係る林学・造園関係の資料には隈無くあたったが、成功の秘訣といった所謂一般向け「ビジネス書」には手が回らず、今回あらためてページをめくることとなった。

本多健一先生は、ご専門は化学技術、特に光エネルギーの開発に力を尽くされた研究が知られており、東京大学工学部教授を定年ご退官されたあと、紫綬褒章（一九八九）や日本学士院

賞（一九九二）、勲三等旭日中褒章（一九九五）、文化功労者（一九九七）、日本国際賞（二〇〇四）等の数々を表彰された高名な学者である。一九八三年から八九年の間には京都大学でも教鞭を執られた。一九五七年にパリ大学で Ph.D.（理学）を取得された先生は、一九七九年にフランスから Chevalier, l'Ordre des Palmes Academiques の称号を贈られている。仏留学の時期を等しくされる平川祐弘先生は、本多先生とペアでピンポン大会に出場した愉快な思い出を記しておられる（『書物の声 歴史の声』二〇〇九年）。お生まれは大正一四年で、数年前にご逝去された。残念ながら生前の本多健一先生にお目にかかることはなかった。

本多静六の『人生と財産』は、一九五〇年に実業之日本社から発売された「私の財産告白」や「私の生活流儀」を再編集したもので、奥付をみると二〇〇〇年に初版発行、二〇〇三年一月に一〇版発行となっている。出版元は日本経営合理化協会出版局というところで、中身は本多健一先生が監修されたようだ。

『人生と財産』は厚さ約三・五センチの A 五判で、拙書『記念植樹と日本近代』と並べてもほぼ変わらないが、ページ数でいうならば本多の方は本文四〇六ページ、拙書五四三ページで百ページほどの違いだが、大きく異なっているのが紙質と文字の大きさである。本多の方は厚みのある書籍用紙に、フォントが一二ポイントと大きく、漢字表記もひかえめ、行間にもゆとりがあって見やすく、ひとめで一般の読者を対象にした書籍であることがわかる。一方、私の本は九ポイントの文字に紙質は薄め、漢字も多い。博論の予備審査から本審査、そして書籍化の段階で（不本意ながら）本文をかなり削り、註も二段組みにするなど工夫を凝らしたが、それでもまだ分厚い。なかなか通読するのが大変で……というご感想、というか、お叱りの言葉をしばしば頂戴する。拙書は専門書に分類されているが、誰を読者として対象にしているかとい

うことは、こういうところにも現れる。本多健一先生が監修された本は、現代社会に本多静六という人物をわかりやすく紹介するために採られた手法であり、祖父の姿をそばで見えていらした本多先生ならではの本づくりといえる。

本多静六と読者層

生前の本多静六、謂わば戦前の本多は大衆社会と広くつながっていた。造林学者かつ造園学者として研究と教育に従事する傍で、新聞・雑誌を通して一般の男性や婦人、子ども向けに読みやすい文章を数多く残している。『實業之日本』から『文藝春秋』、女性には『婦人之友』や『婦女界』、『婦人倶楽部』、子どもたちには明治期の『少年世界』から『日本少年』、『少年少女譚海』等がある。

例えば一般的な話題として「健康」を取りあげたものであれば、『實業之日本』の特集として、三百を超す著名人を集めた「余が日常試みつゝある健康法」（一九二四年、二七巻七号）がある。「徒步」を挙げた本多をはじめ、「安眠第一」の益田孝、「飯は二椀」の安田善三郎、「深呼吸」の武井守正、「間食廃止」の正宗白鳥、加藤玄智は「室内体操」、根本正はメソジスト派らしく「禁酒禁煙」、徳田秋聲は「散歩と冷水浴」、「楽しんで働く」志賀泰山、「成行に任せる」小林一三らが寄せている。『文藝春秋』には新聞社が主催した「新八景」をテーマに菊池寛、石井柏亭らとの「名勝風景座談會」（一九二九年、八月号）が収録されている。

婦人向け雑誌では衣食住から恋愛、育児に夫婦生活等、よりドメスティックな話題が中心となる。例えば『婦人之友』の「家庭圓滿號」では「舅姑別居の可否得失」（一九一六年、一〇巻五号）なる特集が生まれ、「別居するを宜しとするは情けなき」という幸田露伴や岡田哲藏、

佐佐木信綱から、「別居必要」を説く新渡戸稲造や河上肇、「日夕往復」可能な距離に住む志賀重昂、「同居も別居も場合による」という本多や徳田らが若夫婦の暮らし方について語った。同誌の「明日の女性に要求される一つの資格」(一九三一年、二五卷一号)という特集では、母・妻・娘として「夫々當面の仕事に忠實」であれという本多に、「生活力」を挙げた圓地文子、「健康と強き神経」の小泉信三、「自分の地位に目覚めること」を説く片山哲、「賢明」の吉野作造、猪熊弦一郎は「若々しい気持」、木村莊八は「純潔」、「社会意識」の平塚らいてう、「強健さ」の人見絹枝ら百十家がひとこと述べた。

また、ミュンヘン大学で取得した経済学博士の肩書きから本多には経済に関する記述も少ないが、こうした一般向けの雑誌では殊に家計に関するアドバイスが寄せられた。同じく『婦人之友』には自由学園で行われた「家計問題の會」(一九二七年、二一卷一二号)の記録がある。羽仁もと子は勤儉貯蓄と土地取得の利点について、額こそ異なるものの本多と同意見であることを述べ、翌年にも同学園で「公私経済における無駄(WASTE)」(同、二二卷一二号)を主題にサロンが開かれた経緯がある。

もちろん本多個人としての寄稿も多く、明治から大正に係る過渡時代の生活問題を扱ったものから(同、一九一二年、六卷四号)、『婦人倶楽部』で「私の初戀」(一九三二年、一三卷五号)の淡く苦い思い出、戦後、晩年近くに家庭円満の秘訣と長寿法を綴った「幸福なる夫婦生活」(『婦人倶楽部』一九四九年、三〇卷一号)がみえる。

子どもたちには、政府の要請でシベリアや南洋諸島の各地を踏査した経験に基づいた冒険・探検談、あるいは教育者として植物の生態をわかりやすく教える「なぜ栗の實にあんな凄いいがある? お山のお猿やリス君や食べられぬ様に」(『読売新聞』一九三六年、九月一三日)

等がある。

このように当時の新聞各紙に目を通して、専門の森林事業や公園事業に限らず其処彼処で本多静六の名を見かける機会は少なくないし、次に述べる身上相談からいえるように、本多は同時代の一般市民から頼りとされた存在であり、それだけ大衆社会で名の通った人物であったことがわかる。

翻って、現代社会においては初詣の参拝者数が全国第一位であるにも拘らず、その明治神宮を囲む社叢が今から百年ほど前に造られた森であることを知らぬ者は多い。況んやこの森をつくった本多静六の名前をや。幸いにして、一昨年前にNHKで明治神宮の森に関する特集番組が放映されたこともあって、本多の知名度もあがりつつある。戦後の社会から名前が隠れてしまった感のある本多静六ではあるが、彼の類いまれな功績は「百年の森づくり」という言葉の通り、何より原始の森と見紛うまでに生長したこの森がそれを証明していよう。

余談だが、東京大学の文化資源学研究室に在籍していた当時、修論のテーマを本多静六にしたいと相談すると、文学部の中には顔をしかめる先生もおられた。「へんちくりんなおじさん」と呼ばれる先生もおみえになった。一方、農学部の方々は、本多先生は神様みたいな方ですよ、と敬っておられた。賛否両論のあるなかで、この受け捉え方の確たる差からも本多を再検討することの必要性を感じ、前途多難は目に見えていたが、あえて本多静六をテーマにしたのであった。

身上相談

さて、一般大衆と本多の接点といえば身上相談がある。本多が人生に関わる相談を引き受け

るようになったのは、一五歳から二三歳までの苦学時代、「強情な気性^{たち}」という自らの性格矯正のために恩師に勧められて天源陶宮術の大家に付いて観相学を身につけたところにある。二七歳の暮れからは身上鑑定所「南北館」を手伝い、三〇歳で某伯爵家の御家騒動を解決したことが契機となって諸名家の家庭相談にあずかることになった。さらに六六歳の折、朝日新聞への投書をきっかけに三年ほど身上相談を受けたという（『人生と財産』）。

同紙の身上相談の回答には異議を唱え自説を投じたこともある。「生まれた子が親に似ない」という相談に、過去の過ちを打ち明け勇気を出して清算せよ、と回答したM氏に対し、本多は、父母に似ない子は幾らもおる、夫婦の間の子であると断じて信ぜよ、然らばあなたもあなたの家庭も直ちに救われ悲劇を免れる、と答えた（一九三一年八月一五日付）。本多の前向きな回答は「苦蟲から恵比寿顔に」（『婦女界』一九三七年、五五卷六号）という笑顔の育みに象徴される。「百年の計」という森づくりの如く、長い目で人生を捉えよということであろう。

而して『實業之日本』には「身の上相談」コーナーが設けられ、悩める大衆が書面を通じて救いを求めた。「主家の閉店に遭つて途方に暮れる店員」から「両親のために無準備の結婚をすべきか」を悩む女性会社員、「人に嫌はれて悩みつゝある青年」には鏡に向かって自己の悪癖を叩き直した体験を伝えた。心身に関わる切実な悩みから、「新聞賣子になりたい」、「満洲行きの旅費」、「権威ある自動車学校」の教示を乞う実用的な相談もある。担当者の本多や穂積重遠、山室軍平らは懇切丁寧に回答している。

「苦蟲から恵比寿顔に」 百年の名回答

本多の事績にみる方法論や回答が必ずしも当時の世間に肯定されたとはいえないが、後年、

次のようなことがあった。

足尾銅山鉍毒問題の調査委員の任にあった明治後期、本多は損害賠償金の殆どを被害地と無立木地の造林費に充てるよう当時の村民に主張した。地方民は一寸アテが外れて不満気だったが、渋々造林した。それから三〇余年、当時の総代と現村長らが突然本多邸を訪れた。ハテ、昔はよく田舎の総代がやってきたが近頃また何か始まったのかナ、と応じてみると、植林した森が立派に生長して多額の収入が上がるようになり、村は大変豊かになりました、とのことであった。

本多は昔別れた子どもの成長を知らされたような喜びを味わい、こうした喜びに接するのでも「山林といふ生命の長い仕事に関係すればこそ」と自伝に記している。これこそ「苦蟲から恵比寿顔」を生み出した名回答といえよう。

むすび

本多の百年の森づくりの教訓は、このように一般市民の悩みの解決にも活かされていた。百年近い時を経た明治神宮の森も、今ようやくその意義が認められる時期に來たといえるのではないだろうか。私の拙い本も微力ながら少しでもそのお役に立てればと思う。最後に、本多健一先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員／
国際日本文化研究センター共同研究員）

私と日中比較文学の縁

周 関

平成二八年一月三〇日の夕方、薄闇の中で日文研ハウスに着きました。一四年ぶりに日本に来ました！ しかも、古都の京都です！ それに、研究の天国と言われる日文研です！ 夢を叶える興奮、北京ではまだ見られなかった緑、そしてどこから漂ってきた蠟梅の香が心細さと淋しさを和らげてくれました。

大学卒業までは、日本と全く関係のない人生でした。日本文学を勉強するのも、自らの選択ではなかったのです。

大学卒業の年、あの六月の「事件」の影響で運動の中心だった北京大学の卒業生は大学院入学試験を受ける資格を取り消されました。でもその後、先生方の斡旋で、中国文学部は三名の学生を大学院に推薦できるようになりました。幸い、私はその中の一人でした。その時の北京大学「比較文学研究所」の所長、楽黛雲先生に「比較文学を専攻したいなら、日中比較文学を勉強してください」と言われました。嚴紹盪先生は研究所のお招きに応じて中国文学部の「古典文献」から「比較文学」に転勤したばかり、日中比較文学専攻の院生がまだいないからです。しかし、当時の私は日本についての知識はゼロと言え、日本語は五十音図さえも知らない、日本文学と日本の歴史などについてもほぼ白紙でした。どうしたらいい、と三日間も悩んでいました。三日目の日に、楽黛雲先生のお宅を訪れ、「どうしても比較文学を勉強したいの

で、日本語と日本文学を頑張って補習していきます」と言いました。それで、嚴紹盪先生の日中比較文学専門方向の初めての、中国国内でも最初の日中比較文学修士学生になりました。それが始点となって今日まで歩んできました。

大学院に入って直ちに、その辛さが骨まで沁み入りました。初めて大学院の第一外国語としての日本語共通科目コースに行った日の様子が今もありありと目に浮かびます。早々に教室に行って、はっきり聞こえるように一番前に座りました。ベルが鳴るとほぼ同時に、髪の毛がごま塩の清楚な女性の先生が入ってきました。いきなり日本語で話し始め、挨拶か授業の説明かそれとも講義の内容か、さっぱり分かりませんでした。茫然とした顔に気づいたのか、突然私の前に来て〇・五メートルの距離で訳の分からない質問を立て続けに投げてきました。勿論一つも答えられませんでした。そして、「日本語習ったことありますか？」と中国語で聞き直してくれました。「ないです。」「ならここに来て何をするつもり？ 帰っていいよ。」聞き取れないに決まっていると覚悟していましたが、やっぱり地面に穴があれば入り込みたいほど恥をかきました。やっと授業が終わるまで堪えて、急いで宿舎へ帰り、タオルとボディソープなどを取って公衆浴室に行きました。（中国の大学生と院生は全員キャンパスの中の寮に住んで、一九八〇年代から九〇年代、お手洗いは棟内の公衆トイレ、シャワーは校内または校外の公衆浴室に行くしかなく、真冬に女子学生は宿舎に戻った時、髪の毛がもう固く凍ってしまいました。）私の顔の涙をシャワーのお湯と一緒に洗い流したのです。

日本語をゼロから独学するほかはありません。当時の北京大学ではまだ日本語学部が設立されてなくて、「東語学部」に日本語専攻があるだけ、一クラスにたった十数人くらいでした。入門のクラスに聴講に行きましたが、最初は、四年も年下の学生たちから、変わったお猿さん

を見るかのような眼差しを浴びるほどでした。でも、この招かれざる客の受講は一コマも欠けることはありませんでした。今振り返ってみるとき、その厳しい女性の先生にはとても感謝しています。その刺激がなければ、思い切り決心して懸命に頑張ることができなかったかもしれません。

学問の道を志して歩き出した時から、人格も学識も素晴らしい先生方に出会ってばかりです。指導教官の嚴紹盪先生からも学問に励むことのありさまを見聞きして大きな影響を受けました。当時は大学の先生は皆、個人の研究室を持っていなかったため、よくお宅にお邪魔しました。初めて嚴先生のお宅を訪れた時とても印象深かったです。部屋に入ると、玄関から本の山並みでした。その本の狭い隙間を通して先生の机の前に辿り着くと、目の前に机側の壁と反対側の壁の間に何本もの紐を張って、紐の上にメモカードがいっぱい掛けられていました。カードに小さい字がびっしり書かれているのを見て、本当に「知識の海」にいる感じがしました。パソコンのない時代に、嚴先生のコツコツ積み重ねていく姿に頭が下がりました。

高校生と大学生時代に受けた教育に、日本文化についての内容がめったになかったせいか、大学院に入ってから日本についての興味はかえってますます濃厚になりました。ある先生に「反日派」と「親日派」のどちらになりたいか、と聞かれたとき、考える間もなく「親日派です！」と答えました。その先生は微笑んでゆったりと言いました。「僕だと『知日派』になりたいなあ」この一言にはっと気が付き、「本当の研究者になるためには客観的に物事の本質を分析しなければならない、私は日中比較文学領域の『知日派』になれるように頑張っていく」と、その時決心しました。

日中比較文学で私が一番集中しているテーマは川端康成文学研究です。これが私にとって偶

然とも言え、必然とも言えます。偶然というのは、大学生の時優秀レポートの賞品として『ノーベル文学賞受賞作家の創作談』という本を貰ったことが、当時日本に唯一のノーベル賞受賞作家の川端康成に目を注ぐきっかけとなりました。必然というのは、私は心の底から川端文学に惹かれているのです。その仄かな哀しき、その清らかな美しさ、そのしんとした静かさ、その朦朧とした慕わしさ、その払っても消えない淋しさ……。すべてが私を引き寄せています。「研究テーマを決めるというのは、妻を探すことに髣髴し、好きでなければ一緒に居られないからです」と、北京語言大学のイスラエル人の教え子がかつてこう言いました。まったくその通りです。川端文学の魅力に捉えられているので、私は何回読んでも飽きません。さらに、奥の深い川端文学は、年齢によって味わえる余韻と、心うたれる些細な場面などが違ってきます。ですから今迄出版した五冊の私の本のうち、三冊もが川端文学研究です。それに、研究すればするほど沢山の謎が見えてきて、知識の不足と勉強の足りなさが同時に感じられてきました。「知日派」になれるまでの道はまだ遠いです。

ところが、その道で私の研究を進めるには一番の困難が研究資料の欠如です。中国の川端文学研究の始まりはかなり遅いと言えます。川端文学の翻訳と日本学界の研究成果の紹介及び中国自身の先行研究が少なかったのですが、それに加えて、日本語の資料がもっと探しにくいです。一方では、感受性に富んだ川端文学を研究するために、どうしても必要なのは日本の現地体験なのです。でも、中国文学出身の私は、本科から博士まで全部北京で、日本に留学した経験が全くありません。川端文学に描かれた志野茶碗や越後の雪国、伊豆の温泉、北山の杉などは、全部実感のない想像に止まっていました。

しかし幸運にも、とうとう二〇〇〇〜二〇〇二年、愛知大学に行く機会が訪れました。日本

文学の研修ではなく中国語を教えるためでしたが、私の人生で初めての日本文化と接触するチャンスでした。愛大の二年間に一か月で使える給料は九〇〇ドルしかなく、これを除いて残った四分の三あまりは中国国内の大学に上納する決まりでしたので、私は一生懸命節約してできる限り川端文学のゆかりの地を辿る旅に出ました。その中の一つは、『雪国』の舞台、新潟県越後湯沢の旅です。国境の長いトンネルを抜け、川端の足跡を追いながら主人公の島村の行った処を一々探し、そして『雪国』の執筆に使われた高半旅館に泊まりました。雪の季節ではありませんでしたが、晩秋の澄みきっている空の下、茜色に染まった山並みと、道端の斜陽に照らされてふわふわとした萱の穂を見て、小説の中の「萱の穂が一面に咲き揃って、眩しい銀色に揺れていた」場面とその「秋空を飛んでいる透明な儚さ」を初めて肌で感じ心で受け止めました。

愛知大学を離れて一四年間、日本に来るチャンスに恵まれませんでしたが。この一四年間で、私の研究も川端文学から近代日本の中国学に広がってきています。そのきっかけは、一高時代の若い川端が今東光と一緒に東京帝国大学へ中国文学講座を傍聴に通っていたことです。その時講座を担当した先生は、近代中国学の先駆者と言える、二八歳で東京帝国大学中国文学科の助教授になった塩谷温です。その東大の塩谷温に加え、私が中国学の領域でさらに関心を深めている研究対象は、京大の狩野直喜と青木正児などの中国学者にも及んでいます。時間の移り変わりと研究の進みに従って、日本に行きたい、日本文化を肌で感じたい、研究資料を沢山読みたい、という憧れは日に日に強くなる一方でした。ようやく、今年「名物の底冷え」（川端康成の言）の中で「古都」の京都にある日文研に参りました。まるで夢のようで、その嬉しさは言葉になりません。

この原稿を書いている時は、ちょうど「一川煙樹 満城風絮 梅子黃時雨」の季節で、見渡す限り潤いある緑に包まれ、川端の「三方から古都を抱きつつむ山波が、古風な家並の上や道のゆくてに、京都へ着いたとたんに見えて、心はなごみ静まる」という一言を思い出しました。日文研には立派な図書館と森閑な自然があり、ここに来て五か月にもなっていないかもしれませんが、もう七か月後の帰国時には未練を残すに違いないという気持ちでいっぱいです。「一年って、あっという間で、どうしても足りない」と切に思っています。残りの七か月で、日本文化の優雅さと日中関係の緊密さを探求し心で感知して、「知日派」の目標に一步でも近づいていくように、充実した日々を過ごしたい。そして、再び次の夢の叶えられる日を待ち続けようと思っています。

二〇一六年六月二二日

日文研にて

（北京語言大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）

日本が私にもたらした予想外の人生の展開は、 「縁」であり「恩」である

グエン・ヴー・クイン・ニュー

①両親の反対を押し切って始めた日本語学習

一九九二年、ホーチミン市総合大学（現…ベトナム・ホーチミン市国家大学ホーチミン市人文社会科学大学）の英語専攻を卒業した私は、その数年後、ホーチミン市に「南学日本語クラス」が開設されることを知り、英語での受験が可能だったため、親に内緒で受験した。幸いなことに合格したが、当時私は、日本語はもとより、日本がどういう国なのか、「南学日本語クラス」とはどんな組織なのかについても全く知らなかった。現在のベトナム人の若者に「日本語学習目的」を聞くと、「漫画を読みたい、日本に留学したい、日本企業で働きたい」等、はつきりと答えることが多い。しかし、当時の私は、日本に対するイメージというものはもっておらず、日本や日本に関連した資料、図書等もほとんど無い時代であった。ベトナムに進出していた日系企業も非常に少なく、インターネットもなかったので、情報は非常に限られていた。しかし、「南学日本語学校」は入試の倍率が高く、この「狭き門」に入ることができたことは、自分に来た一度だけのチャンスと思い、仕事は辞めて、日本語を勉強することに決めた。ところが、入学する直前になって、親から強く反対された。全く知らない国の言語、しかも目的なしで勉強することは意味がない、と反対されたのである。卒業できたとしても、働ける

日本企業が少ない中では就職困難だろう、と言われた。将来の生活は見えないけれど、「ようやく得られた機会だから、一生懸命頑張るから」と親を説得した。

同年九月の南学日本語クラス第二期生の入学式には、応募人数四〇〇人の中から合格したその他一七人とともに私がいた。日本との出会いは、次々と「花が咲くように」開いていた。二年間の全ては「南学の精神」のご指導と、親からの犠牲から成り立っており、日本との出会いの始まりは、「縁や恩が絶えないもの」だと感じていた。

②総領事館の仕事をしながら修士課程をやりとげる

南学を卒業した一九九四年は、日本の対ベトナム援助が再開された二年後であり、ベトナムへ進出する日系企業が増えていた頃であった。その四年後、在ホーチミン日本国総領事館の職員採用試験を受験した。幸運にも採用され、総領事館の中でも広報文化班というところで仕事をするようになった。日本という国、文化、人々のことをより深く理解できるように、やりがいがあった。本当に良かったと思う。

そして二〇〇三年、たまたまホーチミン市人文社会科学大学の修士課程募集要項を見かけ、受験し、合格した。二年後、「日本の伝統演劇」のテーマで修士号を無事に修了することができた。総領事館の仕事をしなからの研究は本当に苦勞の連続だった。総領事館では、歴代の総領事や広報文化班長だけでなく、他の日本人の職員の方々からも、公私にわたり沢山の応援を頂いたことに感謝している。

③俳句研究…ベトナムで行うのは無謀なことなのか？

修士課程在学中には、ここではなかなか書けない大変なこともいろいろ起こっていたので、修士号を取得した際、「もうこれ以上は勉強するものか」と誓った。しかしその三年後、二〇〇七年には、何か新しい日本の文化を紹介する提案をしなくてはならなくなり、色々と日本の文化に関する本を読んでいた際、偶然俳句に出会った。

「古池や蛙飛び込む水の音」（松尾芭蕉）

言葉自体は簡素なのに、意味されるところが全くわからない。では、どうしてこれが世界で流行っているのか、何が魅力なのか、好奇心が湧いた。ああそうか、これまで俳句はベトナムでは紹介されてこなかった。ベトナムでやってみないわけにはいかない、と思ったのである。俳句をベトナムにも伝えたいと思うならば、一七音詩の重大な本質である「季題詩」というものを顧みることを期待したい。二〇〇七年の夏に、総領事館とトゥオイ・チェー（若者）紙と共催して、ベトナムで初めての「日越俳句コンテスト」の開催を決定した。

しかし、どれだけの人たちが俳句を知っているのか、コンテストに応募してくれる人はいいるのか、非常にドキドキした。ところが、その不安を覆すように、数百人の四千句にも及ぶ俳句（ベトナム語部門と日本語部門合わせて）が応募されてきたのである。ほっとした半面、好奇心も湧いてきた。なるほど、理解のレベルは別として、ベトナムでも俳句はある程度知られているのだと。

私自身俳句についてあまりに知らないことが多いと痛感していたので、その一年後、ホーチ

ミン市人文社会科学大学博士課程を受験し、幸いにも合格した。その頃、日本に留学している友達がベトナムに帰国し、私のお祝いをしてくれた。しかし、彼に会った瞬間、「何をするつもりなの！ 馬鹿なこと！ どうしてベトナムで俳句を研究するの？」と強く言われたのである。仕方がない。もはや頑張るしかない。でも俳句に関する日本語の本を読んでも分からないことばかりである。言葉は難しいし、俳句の表現、内心やイメージを理解することはもっと難しい。本当にバカなことをしてしまったと思って後悔さえした。しかし、俳句を研究すればするほど、確かに難しいのだけれど、その簡潔な詩に込められた奥深い内容に魅了された。その五年後、二〇一三年の夏に、ようやく『俳句…発祥・発展の歴史及び詩形の特徴』の博士論文を完成させ、無事に発表を終えることができ、博士号を取得することができた。

④ 日文研…日本との深い縁

二〇〇九年に、日文研を訪問する機会に恵まれ、稲賀教授より図書館等を案内して頂いた。こんなに綺麗で立派な図書館や研究所で研究できるのは夢でしかないとその時は思っていた。

ほんやりと公園で待つ子の日永

二〇一三年一月、日文研の倉本一宏教授、劉建輝教授、白幡洋三郎教授が総領事館を訪問された。ホーチミン市における日本研究事情等を説明していた時に、先生方より外国人研究員のプログラムの紹介をして頂いた。かつての夢を思い出した。その後、日文研の外国人研究員に応募したいという希望を持ったので、倉本教授に連絡を取った。先生より様々なご指導を頂い

た上で、書類を提出した結果、またも幸運なことに採用されることができた。二〇一五年九月より国際日本文化研究センターの外国人研究員として「現代日本社会における俳句の変化」を研究している。

日文研に来てから自分の夢は現実になっている。日文研の小松所長、倉本教授をはじめ、大勢の教授より様々な貴重なご指導やアドバイスを頂き、俳句の研究資料収集や俳人の紹介等もして頂いた。日文研ハウスは、静かなところが大好きな私にはとても相応しい所である。寒さに弱い私には京都の冬場は辛かったが、四季のある日本に滞在することや、京都の伝統的な文化や風景を楽しむことができた。

冬の夜や温くなる母の声

研究の面では、著名な俳人である松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、正岡子規などの史跡、記念館、句碑、俳風を訪ねたり、絶景として知られている松島や東北地方などを訪問し、俳句ならではの魅力、楽しみに触れることができた。

冬ざれの芭蕉の松や浮御堂

菜の花や平泉町小家かな

訪れた街では、自然の風景や町の姿を旅した思い出を残すために、句を作詩した。私にとっての「俳句の日記詩」の作品をぜひこの機会にお楽しみください。

地すべりに松ゼミ鳴きぬ中尊寺

二日酔い蝶と私もゆらゆらと

また、世界俳句協会や国際世界交流協会を訪問し、俳句の国際的な普及状況等を調べた。そして、俳句の研究状況や俳句の大衆化について理解するために、俳句講演会や俳句ラボを受講したりもした。日本の句会を経験するために、さまざまな句会にも参加した。

いつまでも余花揺らしけり山の奥

句会で初めて日本語で作詩し、選句することにより、日本人の季節感をより理解することができたように思う。また、日本の俳句の美意識とベトナムの俳句にもある精神の美しさの相違点が分かった。

けあらしに水際知らぬ声を出す

この句は（私にとって）昨年が一番寒い時に作詩したが、その後、「けあらし」という季語は、北海道のような極寒地であって初めて理解されるイメージだということを、今年の五月に北海道の俳句集団「itak」を訪問した際に初めて知った。確かに、俳句を理解できるようになるのは難しい。でも、難しいということさえ魅力的だった。

⑤ 来日の初印象

来日の直後に、東京に研究出張があった。日文研からの京都駅行きのバスから降りて、東京行きの新幹線の改札がどこにあるのか分からなかった。バス停で待っている人に聞いてみると、新幹線の改札まで案内してくれた。よく道に迷った私は、いつでもどこでも、私が行きたい場所まで一緒に連れて行ってくれる人に出会うことが有難いほど多かった。来日前に、日本人は冷たいとよく言われたが、知らない人にそんなに親切にして下さったのは信じられないほど感動した。良い思い出であった。

また、とても便利な交通手段である新幹線や、電車等のおかげで、色々なところへ研究に行くことができた。どの駅にも「観光案内カウンター」があり、そこで地図をもらったり、情報等を聞くことができた。日本での生活は便利で安全だ。交通機関を発展させようとしている私の国では、いつ出来るのだろうか、新しい夢を見ている。

ちっぽけな詩は、私に幅広い世界へ旅する扉を開けてくれた。これまでの人生を振り返ってみれば、日本との出会いは、私の人生に「ある時からある時へ」移行するための重要な転換期を生んでくれた。最初はベトナムの若手人材育成への援助の「南学精神」に則った日本語学習、次は「総領事館で働いたことによる日本文化の価値の理解」。そして「人生をかけた俳句研究」を通して、様々な日本での体験や出来事、大切な人との「深い縁」をつないでくれた日文研に対し、私はとても「返し切れない恩」を抱いている。それゆえに、これからも日本と私を結んでくださるだろうか、思わずにはいられない。

(在ホーチミン日本国総領事館広報文化班アシスタント／

国際日本文化研究センター外国人研究員)

京都で舞台芸術における身体を考える

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ

最近の理科系と人文科系の分野において「身体」を吟味する研究は多種多様である。また、日本のみならず、世界の舞台芸術の専門家による身体論も夥しい数に上る。それでは、京都にある日文研で日本の舞台芸術の身体のあり方をいま改めて考えたいということはどのような意義があるのか。

舞台芸術は、演者の身体によってなりたつが、各種の舞踊・ダンス、また能、狂言、歌舞伎などの伝統演劇から、現代の演劇にいたるまで豊かな舞台芸術を誇る日本は、どのような身体観に基づいて、どのような変遷をたどってきたか、そして独自の身体観念をもち、独特の流れが認められるか、そのようなテーマを、一人の力ではなく、多人数の各分野の専門家の協力によって検討することは、私にとって刺激的な挑戦である。

周知のように、日本は今でも息づいている伝統演劇のほかに、近代から変容しながら展開してきた近現代演劇、また多彩な民俗芸能の世界が生み出した舞、踊り、日本舞踊や、モダン・ダンス、舞踏、コンテンポラリー・ダンスなどのようなジャンルもあわせもつ特殊な状況の国である。人間の身体だけではなく、昔から人形に対する深い愛着、親近感を基盤に、人形浄瑠璃文楽を頂点とする多彩な人形劇なども展開してきた。現代の舞台パフォーマンスでは、ロボット・アンドロイドのような人工的な身体も現れている。

身体をめぐる思想、身体と神聖なものとのつながりの信仰、生と死の思想、心身の関わりに対する観念というものの考察は無視できず、民俗芸能、祭祀、儀礼、神楽などの流れのなかに調べるべきものと思われる。その源泉にさかのぼることによって、その意義、本意を観出した。しかし、ある意味では、そのような源流が原型に近い形で伝わってきたのは、中央よりも地方であると思われるが、同時に中国王朝をはじめ、大陸を模範にしながら、大陸と地方からの歌舞、芸能を集め、強い中央集権を立てようとした過程の中で、歴代天皇と宮廷をとりまく公卿、そして武家が育まれた文化もいわゆる「国風歌舞」などを美化、様式化への傾向を進みながら、大事な役割を果たした。同様に、寺院で栄えた延年の舞、風流なども、民間で流行った田楽や大陸からわたった諸芸諸技術からなった猿楽も、地方、寺社などから都へ合流した。また、都から発信される多彩な文化現象の交流によって、救心的、遠心的な動きをくり返し、舞台芸術の豊かな文化活動が人間の生活を育んできた。その過程の中で、平安朝時代から政治機能をはたしながら、経済都市としても発展してきた京都は、時代とともに日本の文化に特別な位置を占め、いまでも色濃くその長い伝統の厚みと魅力を感じさせる。

室町時代に、北山文化、東山文化等を全盛にもたらした足利將軍の政権により保護され、近世でも栄えた能は、観世流、金剛流ともに現在の京都の舞台でも深い趣を感じさせる。また、歌舞伎界でも、上方の系統が戦後に大きく衰えの兆しを見せた中に、上方歌舞伎を代表する家柄、役者などの芸が、限られたレパートリのなかで、上方特有の型に基づいた演技に存在感を取り戻した舞台を見せてくれている。

舞踊の世界

最近、私は舞踊の世界にも魅せられてきた。特に近代になってから、歌舞伎専用の「振付師」としての舞踊の師匠がようやく歌舞伎界から自立し、演劇向けの舞踊の束縛から解放され、独自の創作活動の場をもつようになったのだが、私はそこから発展した日本舞踊に興味をもち、坪内逍遙に触発された新舞踊からモダン・ダンスの芽生えとなる境、その転換期の魅力と問題点に注目してきた。この時期に、女性による日舞の新しい領域を開拓しようとした振付師兼踊り手の女性の姿が輝かしく目立つ。たとえば新潟生まれの藤蔭静樹（一八八〇～一九六六）、秋田出身の五条珠実（一八九九～一九八七）などで、また男性でもモダン・ダンスの先駆者、石井漠（一八八六～一九六二）と舞踏家土方巽（一九二八～一九八六）は同じく秋田、江口隆哉（一九〇〇～一九七七）も青森生まれと、どういうわけか、東北出身者が多い。他方、舞台舞踊ではなく、江戸時代から伝わった座敷舞もある。それは上方舞と呼ばれ、なかに井上流と篠塚流のような京舞もあり、独自の美を発揮してきた。井上流の京舞は、能や御殿舞を源としながら、能の曲をやわらかにくずした「本行物」、文楽などのものを踏まえた「操り式」の曲などのレパートリを持つが、また祇園の師匠となり、「都踊」も創始した。坪内逍遙が指摘しているように、大阪の山村流の柔らかい線による「雪鼎、関月あたりの美人画」のような草書の美意識とは異なった趣で、能のように「直線式」で「厳格の教授法」による動作が「簡素」「沈静」、「的確」「鮮明」で、「几帳面に格に入り過ぎて、自由な、洒脱な面白味には乏しい」という気配も認められるかもしれない（「わが六大舞踊派の特質」一九一七年）。京舞は、舞台のために華やかに踊る女形と立役の歌舞伎舞踊と違い、女性の身に合った独特な舞の美を生み出した。江戸好みには「きびきびした鮮かな面白み」があっても、「窮屈」とも

感じられる閉じられた世界を感じさせるような極く限られたスペースのなかで、静かな地唄などを基調に工夫されたものである。歌舞伎のパツとするような舞台転換、煌びやかな変化を作り出すという所作の運び方と異なる。また、舞台の上で柔らかに、軽やかに身体と身振りを運んでバラエティに富んだ流動性を演出する役者の芸よりも、しみじみとじっくり味わえるゆるやかな能を基盤とした舞である。

変身する身体

能の舞の基本は、平和と繁栄を祈る儀式曲として古来から神聖視されてきた農耕儀礼の舞『翁』、つまり老体の舞である。他方、世阿弥が幽玄の結晶なる天女の舞も、稚児の舞も重要視している。何れにしても、能のシテは、古くから田楽や大和猿楽の伝統から受け継がれた強く険しい鬼の舞とともに、神、老体、天女、軍体、女体など、男性の身体も女性の身体も兼ねることになっている。

事実、能の舞台に神は女性の姿を借り、男性の姿で現れる。憑依によって現れる場合、化身となって出現する場合は別として、神も役者も自由自在に男体か女体として舞台に登場しているのである。また、『井筒』のように在原業平の形見の冠直衣を身にまとい姿を映す紀有常の娘、『松風』のように行平の形見の衣装を着て激しく舞う松風、『卒都婆小町』の深草少将が取り憑いた小町など、「女とも見えず。男なりけり」。

実は、語り物の伝統を汲む能も明らかに示しているように、憑依や化身の場合ではなくても、同じ人物でも、主人公となるシテは、語りの中で、地謡と対話、交代しながら、描写、叙述、動作などによって多数の人物になり変わるような場合はたびたびあるようである。また、

物語性のある日本舞踊でも、そのような独特な手法が生かされている。その変身こそ日本舞踊の魅力のひとつとも言える。

江戸時代の末期に流行る歌舞伎の「変化物」の場合、役者は衣裳、化粧などを変えながら、いろいろな人物に扮する仕組みになっている。変身と物まねのわざを駆使しながら、踊り分ける芸の見せ場を演じるが、その場合、引き抜き、早変わりなどの技法を通して、視覚的にも観客の心と目を奪うバラエティーを織りなす。踊りの中で多種の人物像を形作り、役柄の多様性と俳優の多面性と多能性を浮き彫りにする舞踊となる。神、鬼、人間、動物、植物、幽霊と妖怪変化に変身していく肉体を表現し、物まねと美的表現を極めるのが主眼で、それとともに演出、舞台もスピーディーに転換していくのである。

近代と現代、影／陰としての身体

近代からの舞踊では、自分を通して他を演じるところから、様式（型）と役などといった束縛を消していくことで、より「自然」な自己表現へ、人物を演じないで自分を表現しながら純粹に踊ることに憧れていく。アカデミックなバレエ、能、歌舞伎などの伝統の結晶となった様式に反逆してより自由で個性的なモダン・ダンス、ポストモダン・ダンスが生まれるのである。衣裳なども簡単に略して裸足になって解放された身体性を作ろうとして、内面を深く彫り出し、そこから湧き出る舞踊の「自然」の源泉を探究した舞踊家が登場する。一人、二人のパフォーマンスは力動学による技法と大胆な開発によって、美しさよりも悲しみ、醜さ、苦しみまで繊細な感情表現を肉体で生き、肉体と空間、絵画的なものより彫刻的な創作に勤め、「詩を書く身体」を追求する。歌舞伎にあるような役者中心の圧倒的な芸からの解放でもあり、内

的な「我」を踊り始める方向に展開する。意義からの解放を求め、人物、役にならない一人の人間としての表現、肉体としての存在感のみを主張する。いわば、社会的連帯感、共同体が崩れていく中で、近代の人間の個性、孤独な踊り手一人の表現が中心になる。

戦後の日本になると、「肉体」そのものをめぐる問題は舞台の核心的な課題となつて、激しくグロテスクなまでに官能的な魅力を潜めながら、古代から民間芸能、農耕が生んできた日本的な身体への回帰で、生と死との関わりに迫っていく。

今年の春に開催された KYOTO EXPERIMENT では、海外でも評価されている岡田利規よりも、大駱駝館や個人のダンサーの方が刺激的に感じた。多数の舞台が、次から次へ公開、享受され、消えて、地方に回らないまま、使い捨てになる東京の消費主義と圧倒的な一極主義（パリもロンドンもそうだが）が君臨しがちな日本であるが、それに反して多彩な可能性を提供してくれる京都の伝統、その底から湧いてくる力は、東京とは異なる物作りの創作性の尽きない魅力があると期待できる。ちょうど今、京都芸術センターにて一九九四年結成の京都生まれ、京都芸術大学から飛び出た若手のアーティストグループ、ダムタイプ (Dumb Type) の中心メンバーとして活躍した故古橋悌二のメディア・パフォーマンス作品「Lovers」が開催されている。その美しいインスタレーションの闇のなかに、静かな音とともに流れる切なくはかない人間の陰／影を眺めて、深い感銘を受けた。「肉体」をめぐる問題は生と死と性、時間と空間との関わりなどを実感させるが、光と音のなかで肉体の物質性も消えたところに、アートと舞台芸術の核心的な課題が浮かんできく。その抱きあえないで流れ倒れる姿を目で追いながら、深い感動とともに、能『清経』の有名な一節を思い出した。「来し方行く末をかゞみて終にはいつかあだ波の。帰らぬは古止らぬは心づくしよ。此世とても旅ぞかし。」人生の根幹と深く関

わる踊り／ダンスの生命そのものが見えた。

(ヴェネツィア、「カ・フォスカリ」大学アジア・地中海アフリカ研究学科教授／

国際日本文化研究センター外国人研究員)

空から博物館へ ―一九六〇～七〇年代の風の愛好者の活動―

セシル・ラリ

和風の黄金時代は一八世紀の終わりに始まり、二〇世紀半ばに第二次世界大戦が日本の文化的景観を変えてしまうまで続いた。実際に、戦争中、風を作るために必要な材料の和紙は見つけにくくなって、いくつかの風製作者（例えば、一九二二年東京生まれの小野孝巳）は戦争に召集された。戦後の復活にもかかわらず、一九六〇年代、和風の衰退が始まった。同時に起こったいくつかの要因が考えられる。まず、都市の復興に伴って、建物は高く、通りは狭くなり、電線が張り巡らされたため、風をあげる場所がなくなった。こうした物理的な制約に、ある文化的現象が付け加わった。敗戦後アメリカの占領が始まってから、新しいおもちゃが輸入されて、日本のおもちゃに影響を与えた。また戦前は、たとえば瀧廉太郎（一八七九～一九〇三）が作曲した学校唱歌「お正月」（一九〇〇年）や同じ頃の『尋常小学読本唱歌』の「たこのうた」のように、子どもたちの正月の風揚げを題材にした歌が多く作曲されたが、戦後、新しく輸入されたクリスマスの曲もよく歌われるようになった。最後に、ハイテクなおもちゃの開発が進み、木や和紙で作られた伝統的なおもちゃは、子どもたちにとって、古臭いつまらない物になり、その存在すら子どもたちには忘れられてしまった。

東京・日本橋にある風博物館の創設者の茂出木心護（一九一一～一九七八）は、一九七七年一月一五日に行われた博物館の開館式での口上で、友人のデザイナー鳥居敬一から聞いた話

をもとに、和風文化の衰退を語っている。東京を歩いていたときにすれ違った男の子が、奴^{やつこ}風を指しながら、母親にこれは何かと聞いていた。母親が答えても、男の子は理解していないようだった（『にほんばしのぞき眼鏡 ついこのあいだ下町の風景―「たいめいけん」の洋食と風』）。奴風は東京で典型的な形の風なのだが、戦後三〇年もたたないうちに東京の子どもたちはそれが何かわからなくなってしまったのである。日本の風文化の衰退を目の前にして、風の黄金時代を子どものころ経験していた何人かの愛好者は、この文化を保存する活動を始めた。

最初のコレクション、最初の本、最初の博物館・アマチュアたちの活動

風文化が衰退し始める前から、風の収集家は存在していたが（例えば、茂出木心護は子どものころから風が大好きだったので、一九二〇年代後半から収集を始めた）、日本に現在所蔵されている風のほとんどは、戦後に収集されたものである。たとえば今日法政大学博物館に所蔵されている二つのコレクション、つまり、風に情熱を注いだ実業家の比毛一郎（一九二二～二〇〇三）のコレクションと、東京にある民芸の専門の備後屋の創設者の俵有作（一九三二～二〇〇四）のコレクションが挙げられる（前者は風を一九九五点、道具とおもちゃを一六三点、浮世絵と風絵を五三二点含む）。収集の際、茂出木心護、比毛一郎、俵有作は三人とも同様のアプローチを行った。日本全国を旅して、各地域の風と風絵の目録を作成したのである。このアプローチは以前から活動していた日本の郷土玩具の団体と、戦前に柳宗悦が始めた民藝運動のアプローチを採用したのである。風は郷土玩具のサブカテゴリーに属し、風の愛好者が組織される前に、郷土玩具の団体はいくつかの調査を行っていた。そして、郷土玩具は民芸のサブカテゴリーと考えられる。しかし、郷土玩具（風を含む）と民芸についての研究は、日本

において最初全く別々に発展していったように見える。

俵有作のコレクションの大部分は一九六三年に短期間で収集されたものだが、当時の日本の
風文化の全体像を手渡してくれる。当時俵有作は八か月で全国の数多くの工房を訪れ風を収集
した。そして翌年、初めての和風の目録を作成するため、収集した三〇〇点を、六三のカラー
図版で紹介する『日本の風』（美術出版社）を出版した。その本は、日本の伝統的な風が地域
によって豊かな多様性を持つことを、初めて明らかにした。それまで、風の製作者と愛好者が
知っていたのは、主に自分たちの街、あるいは近隣の街の風であり、多種多様な風が存在する
ことの重要性に気づいていたものはほとんどいなかった。それまで風の歴史に関する本は西洋
的な歴史に対応し、日本の独自性に対する配慮に欠けていたが、この最初の和風についての本
は、東京に住んでいた茂出木心護や比毛一朗のように、彼と同時代の愛好者やコレクターに
とって、後の大阪に在住の木村薫（一九四八〜）や白根在住の巻口厚志（一九五六〜）に
とっても、モデルになった。現在、木村コレクションは大阪歴史博物館に保存され、巻口コレ
クションは自宅に保存されている。

日本の伝統的な風の最大のコレクションは、おそらく一九二〇年代後半に茂出木心護が始
め、現在は彼の息子茂出木雅章（一九三九〜）が引き続き収集を続けるコレクションであろ
う。このコレクションの図録が出版されたにもかかわらず、現時点で正確な目録がない。しか
し風博物館で働いている福岡正巳（一九五七〜）の概算によれば、博物館には三〇〇から
四〇〇の風が展示されているが、風コレクションの大部分がストックルームに保存されてい
る。このコレクションには、他にも五〇点以上の浮世絵やいくつもの道具が含まれている。卓
越した料理人でありレストラン経営者である茂出木心護は、風の愛好者、収集家であり、風の

愛好者たちのパトロンでもあった。彼の興味の中心である、美食と風は不可分なものとなった。一九四八年に、洋食専門店の「たいめいけん」をオープンした。東京・日本橋（現在、野村ビル）に位置するこのレストランはすぐに、彼が収集した風の展示場所となった。また、生活に苦しむ風製作者を助けるため、例えば、東京の風製作者橋本禎造（一九〇四～一九九一）に毎年千支の風を依頼し、一五〇〇円で仕入れて、一〇〇〇円で「たいめいけん」で売っていた。

そして一九七六年に茂出木心護は日本橋（たいめいけんの現在位置）に新しい六階立ての建物を建てた。四階までは自分のレストランにあて、五階と六階はオフィス用に貸すことを計画していた。しかし、借り手を見つけられず、自分の風コレクションがあまりにも膨大になり自宅で保存することが困難になったので、結局「たいめいけん」の五階を風博物館にすることに決めた。その際、六五歳の茂出木心護は健康上の問題を抱えていて、入退院を繰り返していた。その結果、日本の風の会のメンバーの友人にこのプロジェクトの実現を託さざるを得なかった（茂出木心護「風の博物館うら嘶」『日本の風の会会報』第一四号 一九七八年二月 二頁）。一年間ほどの準備の後、一九七七年一月一五日に日本の風の会のメンバーだけでなく、いくつかの新聞や放送の記者も取材に訪れた最初の風博物館の開館式で、茂出木心護は赤と白の風の尾をカットした（図1）。それは、日本だけでなく世界で最初の風博物館であった。それ故、この博物館の開館は日本人だけでなく、外国人にとっても日本の風の再評価における重要なステップであった。

日本の風の会の作成

活動を組織するために、風愛好者の小さなグループはレストラン「たいめいけん」で茂出木



図1 茂出木心護「風の博物館うら嘶」
『日本の風の会会報』第14号1978年2月 p.3

心護と俵有作と斎藤忠夫（一九一九～一九九三）を囲んで定期的に会うようになった。その会合は当初非公式なものであったので、それがいつ始まったのかを明らかにするのは難しい。しかし、俵有作のリーダーシップの下で活動を公式なものにするため、このグループは「日本の風の会」（一九六九年一月二三日）を設立した。設立者は、俵有作、茂出木心護、斎藤忠夫、松沢一雄、小島正男、三浦利男、森康助、広井力（一九二五～）、島田喜一郎、佐藤英博、橋本禎造、越田建嗣、藤井敬子、多田福男、比毛一朗の一五名である（『当会発足五週年にあたって』『日本の風の会会報』第八号一九七四年十二月 三六頁）。設立のころ「たいめいけん」で撮影された記念写真（図2）には風の会のいくつかのメンバーの顔を確認できる（後列左から）…佐藤英博、不明、不明、茂出木心



図2 風の博物館所蔵

護、斎藤忠夫、俵有作、広井力、多田福男・
（前列左から）…不明、橋本禎造、森康助、
三浦利男、島田喜一郎、比毛一朗である。会
の設立のため主導的な役割を果たしたにも
かかわらず、俵有作は茂出木心護に風の会の
活動を任せることにした。実際、「たいめい
けん」レストランは風の会の活動の拠点で
あって、茂出木心護は日本の風の会の活動の
ための資金の多くを出していた。茂出木心護
は一九七八年六月一日に亡くなるまで風博
物館の館長を務めた。彼の死後は、息子の雅
章が館長職を引き継いで、日本の風の会の会
長に任命された。

公式に設立されたにもかかわらず、当初、
会費や会則もなかった。とはいえ、メンバー
の活動は非常に活発であった。設立以来、日
本の風の会は毎年三度全国風揚げ大会を開
催し（一月二日、五月五日、十一月一日）、
一九七一年からは、一年二回『日本の風の会
会報』を発行し続けている。その会報は、メ

ンバーによって、メンバーのために、書かれている。記事には、日本の風の様々な作成方法、揚げる方法を説明したもの、国内外の風のイベントのレポート、和風の歴史についての調査などがある。当初一五人だった日本の風の会のメンバーは、一九七〇年代と一九九〇年代の間に徐々に数を増した。茂出木心護は日本橋の風博物館の開館によって日本の風の会が注目を集め、会員数が増加したと証言している。風博物館に来館の際に、風の会に入会するものも数多くいた。しかし、その後、会員数は減少し始め、二〇一六年七月現在、九八〇人である。

日本の風の会の創立後に、郷土玩具の団体はそれまで行っていた風の研究をすべて日本の風の会に任せることになった。こうして、日本の風の会の創立は、郷土玩具の中で特定のジャンルとして風を確立し、伝統的な日本の風の再評価を進める上で大きな役割を果たしたのである。

著者は原稿の執筆に際して松井久氏、『日本の風の会会報』編集長の伊地知英信氏の協力に感謝する。

参考文献

茂出木心護「風の博物館うら嚟」『日本の風の会会報』第一四号 一九七八年二月 二～四頁

「当会発足五週年にあたって」『日本の風の会会報』第八号 一九七四年二月 三六頁

伊地知英信（編）『にほんばしのぞき眼鏡 ついこのあいだ下町の風景―「たいめいけん」の洋食と

風』たいめいけん 二〇〇九年

俵有作『日本の風』美術出版社 一九六四年

比毛一朗『風大百科 日本の風・世界の風』美術出版社 一九九七年

（パリ・ソルボンヌ大学／博報財団招聘研究者／国際日本文化研究センター外国人研究員）

翻訳への思い

李 愛 淑

一年間の国際日本文化研究センターでの滞在から戻ってまもない、六月一日に韓国のマスコミは一斉に次のような見出しの記事を発信し、大々的に報道した。

『『菜食主義者』翻訳者、韓国のノーベル賞への執着に戸惑いを感じる』

これは、二〇一六年度マン・ブッカー賞国際部門 (Man Booker International Prize 2016) の受賞作である『ザ・ベジタリアン (The Vegetarian 原作タイトルは菜食主義者)』の翻訳者がマン・ブッカー賞受賞を記念して来韓し、インタビューした時の発言である。連日話題になった。

今年の五月、韓国の作家が初めて海外の権威ある文学賞、マン・ブッカー賞国際部門を受賞したことで韓国社会はお祭り騒ぎだったそうだが、どうしてノーベル文学賞のことへと翻訳者の話は飛躍したのだろう。

その背景には韓国社会のノーベル文学賞受賞への宿願がある。毎年一〇月、ノーベル文学賞発表の時期になると、韓国社会は過度な関心を寄せては、へ今年こそはの期待とへ今年もまたの失望を反復していた。だからこそ、イギリスのマン・ブッカー賞がノーベル文学賞やフ

ランスのコンクール文学賞と共に、世界的に権威ある文学賞であることから、マン・ブッカー賞受賞の続きでのノーベル文学賞受賞を夢見たに違いない。だから翻訳者は、「文学賞は賞にすぎず、作家は書き、読者はその作品を楽しめばいいのです。それだけで、作家は報われるのです。」といい、韓国社会の文学賞に対する過度な意味付与を一喝したのである。マスコミも、外からの目を通して、ノーベル文学賞受賞でこそ韓国文学が認められると思う韓国社会の認識に警鐘を鳴らしたのかもしれない。

実際、ここ数年韓国文学の世界化をスローガンに、その象徴としてのノーベル文学賞受賞という具体的な目標を立てて、韓国文学翻訳院 (<http://www.klti.or.kr>) は海外での韓国文学の外国語訳を積極的に支援してきた。その政策の基底には、翻訳を韓国文学の世界化のための手段と見做す認識があった。その韓国文学翻訳院の支援をうけて『ザ・ベジタリアン』は念願の海外の文学賞を韓国に与えてくれたが、同時に、翻訳を文学賞獲得の手段として見做していた韓国社会に、賞より読者が楽しむことの大事さ、異文化間の共感の大事さを説き、われらの自省の契機を作ってくれた。

最初私は韓国社会の内密な願望をつかれ、不便であるはずの翻訳者の言葉を、大々的に報道するマスコミの変化に違和感を感じていた。翻訳や翻訳者にこれほど関心が集中し、話題になったことがあったのだろうか。たぶん、マン・ブッカー賞国際部門は英国で出版された外国文学の英訳本を対象にするがために、作家のハン・カン（韓江）と翻訳者のデボラ・スミス（Deborah Smith）が共同受賞したからであろう。『ザ・ベジタリアン』を支援した韓国文学翻訳院の翻訳支援事業の思わぬ成果、翻訳を通して、イギリスの読者が無名の韓国文学を楽しむことの意味に注目される。異文化の読者が楽しみ、共感できる、それこそ真の意味での韓国文

学の世界化ではないだろうか。ノーベル賞の呪縛から解き離れ、その意味を大事にしたい。

さらに私個人としては、『ザ・ベジタリアン』翻訳者が、三年間の韓国語学習で、異文化の読者が楽しめる翻訳を出したことに興味を感じている。『源氏物語』韓国語訳をしようと思いつながら、いつも回避してきた自分に思い至り、どうも後ろめたくもあるが、また限りなく羨ましい。私はどうして韓国では無名の『源氏物語』のことを嘆くばかりで、韓国の読者のための韓国語訳という道へ、進まなかったのだろうか。

勿論前人未踏の道ではない。すでに『源氏物語』韓国語訳はある。一九七三年（柳呈訳『源氏イヤギ上・下』乙酉文化社）、一九九九年（田溶新訳『源氏イヤギ1・3』、ナナム出版）には一応原文の韓国語訳が世に出た。そして二〇〇七年には瀬戸内寂聴訳『源氏物語』（金蘭周訳『源氏イヤギ1・10』ハングル社）、二〇〇八年には大和和紀の『あさきゆめみし』の翻訳（李キルジン訳『源氏イヤギ1・10』AKコミュニケーション）が出された。まさに四〇年来の翻訳と紹介の歴史はあるが、未だに『源氏物語』は韓国社会では知られず、無名のままである。

無名の『源氏物語』、韓国でのこの状況はいかにも不思議である。なぜなら、『源氏物語』の背景である、王朝時代は韓国の読者にはとても親近感のある時代である。たとえば、日本での韓流の一翼を担っている王朝歴史ドラマをみても、王朝時代、権力闘争、後宮での政治と恋、波乱万丈の人間の物語は韓国読者に人気のある素材である。また韓国ではここ数年間、町の人文学者の活躍のおかげで、古典文学、歴史のブームまで巻き起こっている。王朝物語に対する大衆の関心は最高潮に達している。これらの条件からしても、異国の王朝物語、『源氏物語』に対して韓国読者は違和感を感じないで、楽しめるはずだ。共感の土台は出来上がっている。

にもかかわらず、『源氏物語』は読者の手から離れ、いや大衆の手の届かない遙か向こうに位置している。韓国の読者が楽しめる『源氏物語』韓国語訳を必要としている。

また、『源氏物語』韓国語訳を避けてきた自分はどうも悔しさを感じないではいられない。私にとって、『源氏物語』翻訳への思いはとても複雑である。かつて大学時代の私に、『源氏物語』は難攻不落のお城であった。古典語は硬い城壁で、私の入城をなかなか許してくれなかった。とうとう自分の無法さに気づき、今度は現代語訳は飛ばし、迂回の道として『源氏物語』韓国語訳を図書館で探し出した。自分に有利なところから攻めて行くのは良い戦略だろうと思いい、意気揚々と難攻不落のお城攻めの一步を踏み出した。そしてまもなく、韓国語訳も硬く、丈夫な城壁であることに気づき、期待しただけに落胆した。いや二度にわたる戦いに追いまわれ、私の意欲はくたくなり、憂鬱のどん底にまで落ちてしまった。幸い若さのおかげであろるか、挫折から立ち直り、時間と根気を戦略として、古典語という城壁を攻め、とうとう『源氏物語』というお城にたどり着いた。しかし、それまでの苦難の道程のためだろうか、いつまでも『源氏物語』の前で立ちつくしている自分に気づく。

考えてみれば、韓国語訳から攻める戦略はなかなか良いと思うのだが、どうして失敗したのだろう。『源氏物語』原文同様、『源氏物語』韓国語訳も難攻不落のお城だった。その当時は攻める自分の至らなさを自責したが、原因はそれだけではなさそうだ。『ザ・ベジタリアン』の翻訳者は無名の韓国文学を翻訳し、イギリスの読者が楽しめるようにしたのではないだろうか。翻訳者、翻訳の責任は免れない。今読み返しても、『源氏物語』韓国語訳は読者にやさしいものではない。語り手の存在を度外視した硬い文体、漢字同様の古い言葉遣い、『源氏物語』を熟知している翻訳者中心の翻訳姿勢が、異国の文学と始めて対面する読者を困惑させ、作品

への集中を妨げる。異国の物語、『源氏物語』と韓国読者との間隔を埋めてくれるところか、拡大させてしまう。

たとえば、漫画という絵の力で読みやすいはずの『あさきゆめみし』の韓国語訳の場合も例外ではない。一例をあげると、桐壺更衣が次々と贈られる物の贈り手を推測する「いったいどなたが？」での「いったい」は、随所で使われている言葉である。それに該当する韓国語訳として翻訳者は、「デガンズル(대관절)」という言葉を使うのであるが、韓国の読者は「デガンズル(대관절)」を見つづけるたびに、首を傾げてしまう。そして呼吸が乱れ、読みのリズムが崩れる。なぜなら、「デガンズル」は高い年齢層の言葉遣いで、思わず翻訳者の年齢が気になってしまう。いくら王朝物語とはいっても、一般的には「ドデチェ(도대체)」、漫画の口語体を考慮すれば、「デチェ(대체)」の方が王朝時代の雰囲気とそなわず、分かりやすい。もし十代の読者なら、「デガンズルって何？」と、言葉の意味が分からずそこで戸惑ってしまうかもしれない。

また、高い年齢層の特徴である漢字言葉で、読者を困惑させ誤読に導くこともある。光源氏の元服後、桐壺帝は「まだ年もゆかぬのに元服姿は見おとりするかと案じていたが」と、成人した光源氏の立派さを婉曲的に讃える。すると左大臣は帝に、「かえっていっそうお美しさをましたように思われます」と、光源氏的美質を讃え、臣下としての礼をもつくし、共感する場面がある。韓国語訳をみると、桐壺帝の言葉を「아직 연소한 연세여서 관례의상이 어울리지 않을까 염려했으나」と訳しているが、傍線の「ヨンソハン ヨンセ(연소한연세)」は漢字言葉で、「年少な御年齢」、つまり「若年」の意味になる。特に「御年齢」を修飾する「ヨンソハン(年少な)」は漢字読みの硬い表現で、口語体では死語にも近い。「ヨンセ(御年齢)」は古

めかしくも丁寧な言葉で、まるで桐壺帝が光源氏に敬語を使うような誤解を招き、読者は左大臣の言葉として誤読しかねない。しかも、左大臣の「思われます」を「ガッデグンヨ（갈디곤요）」、つまり「ようです」と曖昧な口調に翻訳することで、桐壺帝と左大臣、そして光源氏の関係に混乱をもたらし、読者の誤読を招いてしまう。

結局、長い間自分の才能のなさを口実に『源氏物語』韓国語訳を避けてきた私なりの責任を痛感してしまうわけであるが、とうとう真摯に韓国語訳に立ち向かう決心をした。翻訳への思い、それが私の一年間の日文研での滞在からの最大の収穫でもある。自分の苦い思いを噛み締めながら、読者が楽しめる『源氏物語』韓国語訳をしよう。

（国立韓国放送大学教授）

「妖怪ウォッチ」から見える時世

マティアス・ハイエク

数ヶ月前、任天堂3DS用のゲームソフト、レベルファイブの「妖怪ウォッチ」がヨーロッパで発売された。それに合わせて、フランスの『*Le Monde*』紙から私にインタビューの依頼が来たが、困ったことにゲームの内容がまったくわからなかった。ゲーム好きの自分は、一度もやらないでゲームのことを語るのをよしとするはずもない。幸い、現在は日文研に来ており、早速「怪異・妖怪文化資料データベースプロジェクト室（通称小松研）」に行ってみると、研究資料としてソフトは揃っていた。流石日文研だ。あるいは流石小松研といったほうがいいのかもれない。自分もひと昔前までそのプロジェクト室で働いたことがあるが、あの頃からマシナリなどを含めて妖怪関係の画像資料を収集するという方針が決まり、それがずっと継続されているわけで、とうとうゲームまでも収集される時代になったなあと、まず感嘆した。しかしよく考えたら、驚くほどのことではない。アーケードゲームはもとより、任天堂のファミコンが台頭する八〇年代の家庭用ゲーム機が、全世界に普及して以来、日本製のテレビゲームはマシナリなどよりもいち早く一種の日本文化を伝える媒体となった。この「ゲームによって伝わる日本文化」には、幾つかのレベルがあると思う。

それはまず「ビジュアル」のレベルで、つまり日本独特の要素がゲームのビジュアルに多用されるということだ。例えば自分が初めて「たぬき」を、変化能力を持つ「妖怪」として認識

できたのは、「スーパーマリオブラザーズ3」（任天堂、一九八八年日本発売、一九九一年欧州発売）をプレイした時である。ゲームの主人公のマリオは、アイテムによって様々なパワーアップした形に変身でき、そのうちの一つは「タヌキマリオ」だ。「タヌキマリオ」は地蔵菩薩の石像という無敵の姿に化けることができるが、石像なので動けない。この要素は後に別のゲームにもしばしば採用されるが、日本的なコンテキストから発生していながら、やがてビデオゲームを横断する「文化」の一部となり、広く共有されるようになったのである。

もう一つのレベルというのは、「設定」である。こちらは、ゲームのビジュアルに日本色があろうかなろうかと関係なく、小説と同じく製作者（プロデューサー・ディレクター・デザイナーなど）の思想・思考、あるいは経験が作品に何らかの形で反映され、「日本らしさ」を醸し出す、もう一つの文化的・社会的背景である。たとえば、「ポケモン」（任天堂、一九九六年日、一九九九年欧）に多大な影響を及ぼしたRPG、糸井重里制作の「MOTHER」シリーズの第一作と第二作には、モデルタウンのような田舎町、高速バス、デパートにガススタンドなど、八〇年代・九〇年代のアメリカ映画的なビジュアルを持つ一方で、父親の単身赴任（主人公である息子とは電話越しでしか接しえない）、長島茂雄からもらった野球ボールという主人公の宝物、あるいは、「あれ」という忌み言葉を名に持つ敵キャラのゴキブリなど、日本を連想させるような要素が豊かで、このシリーズの世界観の形成に大きな役割を果たしている。

もちろん、ビジュアルにしても、設定にしても、ゲームの制作過程においては二の次で、後から付け加えられることが多い。むしろ、一つのシステムから始まることがほとんどで、ゲーム機（ハード）と媒体（カセット、CD、DVD、SDカードなど）の機能、特徴や制限を考

慮することで徐々に核となる部分が成り立っていき、ある程度できあがったシステムの上にビジュアルやキャラクター設定を、衣服のように被せるわけである。

かといって、ゲームの設定やビジュアルが重要でないわけではない。完成したゲームの受容は、システムにのみ左右されるものではなく、やはりビジュアルの貢献も大きく、どんなに斬新で面白いシステムでも、多くのプレイヤーに興味を持たせる「外見」と、プレイ中にゲーム世界に引き込み、ある種の共感を覚えさせる「設定」がないとヒットはしないのである。

では、「妖怪ウォッチ」はどうか。早速プレイしてみると、設定にたいへん驚いた。当初、「システムは宗家のポケモンと大して変わっていないさそうなので、設定も近いだろう」と思っていたのに、その先入観が早くも碎かれたからだ。システム上は確かにポケモンに近似しており、基本的にゲーム内の主人公を操り、「妖怪」を見つけてはすでに持っている妖怪との戦闘になり、勝利したら負けた方の妖怪を獲得するという流れである。また、妖怪にはポケモンと同様に幾つかのタイプがあり、それぞれのタイプは互いに相克関係を持っているので、戦闘時には相手のタイプに勝る妖怪を選ぶのが肝心。ただ、ポケモンと違って戦闘はリアルタイムで、つまり開始後は戦略を考える暇もなく、即断で操作しなければならず、難易度は低いとはいえプレッシャーがかかり、プレイヤーを忙しくさせる仕様である。

しかし、それ以上に「ポケモン」と比べて「妖怪」という存在の位置付けと、ゲームの目的、進行条件、または主人公のバックストーリーなどの設定に対して、強い違和感を抱いてしまった。

「ポケモンレッド」が欧州で発売されたのは一九九九年で、日本より三年も後だった。当時の自分は学部生だったが、「子供向け」という第一印象を振り切ってプレイしてみたら、上記

の「MOTHER」に似た王道的なRPGであった。

既定の名前のない主人公が、「ポケモン」という生物を集めながら成長させ、道場を訪れては「ジムリーダー」を倒し、最終的には「伝説のポケモン」までもゲットできる世界一の「トレーナー」になるという設定である。また、少年（少女）にはライバルがあり、自分を支える大人は母親（父は不在）と親とは違う存在である知識提供者、オーキド博士だ。博士から初めてのポケモンと、「すべてのポケモンをゲットする」という人生の目的を授かった主人公が旅に出るところからゲームが始まる。これらの設定は、九〇年代の典型的な冒険・熱血ものなど、当時の多くの少年マンガ・アニメに共通するもので、家（Ⅱ日常・安全・子供時代）を離れ高い目標を達成するために世界に出て、仲間を集めながら真人間に成長していくという物語の流れを汲んでいる。つまり、いつも高いところを目指し、理想を追求するという教訓的な側面があると言える。

また、ビジュアルだが、ゲーム世界においてポケモンは当たり前のように存在する生物であり、強いて言えばポケモンがあつてこそ成り立つ世界である。だから、ポケモンを探しゲットしようとする主人公は、社会的に認められる志向をもっており、同様な志向の持ち主と関わりながら、成長して行く。すなわち、ゲーム内の社会のど真ん中にいるのである。こちらの方も、やはり少年マンガにも見られる（やや古めかしい）「社会勉強」的な教訓性が顕著である。さらに、「ポケモンを集める」という発想はいうまでもなく、カブト虫などの昆虫を集めて、戦わせ遊ぶという、日本ならではの遊びが背景にある。しかもその延長上、虫や動物が多く生息する「田舎」がポケモンにおいて肯定的に強調されており、公害の激しい「都市」と対照的に描写されている。総じて言えば、ポケモンの設定やビジュアルは「昔ながらの道徳的な教

育」と「現代的な平等性」など、バブル崩壊後にありながらも、希望に満ちていた時代の理想を具現化したものだった。

対して、「妖怪ウォッチ」の場合、「桜町」というニュータウンに住む平凡な少年ケータ、あるいは少女フミちゃんが、夏の自由研究の課題である昆虫採集をめぐる学校と同級生に挑発された結果、裏山に虫を探しに行き、普段目に見えない「妖怪」という存在を知る。そして、それを可視にするアイテム、「妖怪ウォッチ」とともに、案内役の幽霊執事を得て帰ってくるというところからゲームが始まる。ストーリーが進むと、頻繁に起こるらしい親の痴話げんかや街の人の異変の原因は「妖怪」だと判明し、主人公は新しい妖怪を集めながら町を探検し、住民の問題を解決していく。

ゲーム内の妖怪は主人公にしか見えない存在であり、ライバルや対戦相手もない。そして、妖怪側の代表キャラクター、「ジバニャン」との出会いを経てわかるように、「妖怪」とは「死者」であり、猫又のジバニャンを初めとして「動物霊」的なものが極めて多い。ゲームの最終目的は妖魔界へ行ってラストボスを倒し、妖怪のいたずらに終止符を打つということだ。ゲーム終了後、主人公が日常に戻ったかと思えば、妖怪の仲間たちは再び姿を現し、主人公と遊んでいく。

また、ビジュアルでいうと、町の構造は日本の現状を反映しており、キャラクターは「日本に昔からある妖怪」と、銘打ってのローカルなデザインで、現代の日本文化と古来の妖怪像を踏まえた作りである。

総じて言えば、目指すべく「上」も存在しなければ、妖怪の収取を通して、ゲーム内の社交性を高めることもない。しかも、一つの町という閉ざされた空間から出ることもなく、世界を

回って成長するという冒険性もない設定である。

主人公は理想を追求するどころか、現実の社会的なプレッシャーに耐えきれず、精神が少し不安定な子供が家庭の問題を妖怪という不可視な外因に求めたあげく、それらの死者と戯れる日々をおくっているようにさえ見える。妖怪キャラクターの可愛さとはうらはらな、なんとも暗い世界である。

ポケモンの（過剰に）ポジティブな設定に時代性を見いだせるなら、この閉塞的な思想背景は今の時代を多少反映しているということになる。「妖怪ウォッチ」のブームは、キャラクターデザインやシステムに魅かれた若年層のユーザーにこのような世界観が共有されていくことを意味すると考えると、ゲーム好きとしては遺憾と不安に思うとともに、歴史社会学者としてはとても興味深く観察していきたくるのである。

（パリ第7・デイドロ大学東アジア言語文化学部准教授／
国際日本文化研究センター外国人研究員）

タゴールの詩集『ギタンジャリ』と日本

ギータ・A・キニ

はじめに

タゴールはインドでは「Viswakabi（世界の詩人）」として知られています。詩集『ギタンジャリ』により、一九一三年アジアで初めてノーベル文学賞を受賞し、世界との絆を結ぶことになりました。そんなタゴールの初訪日百周年記念の機会に『ギタンジャリ』が日本の人々にとどのような影響を及ぼしたかについて検討してみたいと思います。

ところで、念のため申し上げておきますが、詩集『ギタンジャリ』はまずタゴールの母国語ベンガル語で書かれ、出版されました。一方、タゴールのノーベル文学賞受賞対象作品となった英語版『ギタンジャリ』は、実はそのベンガル語原典版からの忠実な逐語訳ではありません。この英語版は、勿論原典ベンガル語版の主旨に添いながらも、タゴール自身がさらに自由に発想を膨らませて翻訳作品化した、もう一つの『ギタンジャリ』とでもいうべき性格を持つものになったものであることを、心にお留めいただければと思います。

論を進めるにあたり、ここでは次の書物を参考にしました。

1) 『タゴール詩集 新月・ギタンジャリ』高良とみ訳 アポロン社 一九六四年

2) 『タゴール詩集』 山室静編 世界の詩三九 彌生書房 一九六六年初版発行

(今回のエッセイでは、一九九一年一九版発行のものを参考。)

3) 『タゴール詩集 ギーターンジャリ』 渡辺照宏訳 岩波文庫 一九七七年第一刷発行
(右に同じく、一九八八年第八刷発行のものを参考。)

4) 『ギタンジャリ』 森本達雄訳註 第三文明社 レグルス文庫(二〇九) 一九九四年

5) 『タゴール著作集』 第三文明社 第一巻 一九八一年

(『タゴール著作集』には右記の四人を含め沢山の方々が参加貢献している。)

『ギタンジャリ』の翻訳に携わった翻訳者略歴

高良とみ…一九一六年タゴール初訪日時、日本女子大学の学生としてタゴールに接する機会を得る。その後のタゴール訪日時には通訳として参加。一九三五年にシャンティニケトン訪問。元日本女子大学教授。元参議院議員。元日印タゴール協会長。

山室 静…北欧文学研究者。詩人。評論家。青年時代にタゴールを知り、晩年まで翻訳に携わる。

渡辺照宏…元九州大学教授、インド哲学、仏教学者。ベンガル語、サンスクリット語、ドイツ語など多くの言語に習熟。

森本達雄…元名城大学教授。元ビッショ・バロティ大学客員教授(一九六四～一九六七)。大学時代日本語を教えていた米国宣教師から『ギタンジャリ』を紹介される。

翻訳者の熱意と翻訳出版にまつわるエピソード

興味深いことに、高良とみの『タゴール詩集 新月・ギタンジャリ』はインド元首相ジャワハルラール・ネルーの『インドの発見』などの著作の日本語版による版權料によって一九六四年に出版されました。ネルー首相のタゴールに関する見解の日本語訳がこの本の序文に載せられています。

山室静の翻訳は三回にわたって出版されました。三番目の彌生書房版の序文に山室静は前の二つの出版について次のように述べています。「最初（河出書房版）は昭和十八年で、まだ戦争中のことだった。大東亜共栄圏などというお体裁のいいかけ声の陰に、いかにも非人道的な侵略戦争がおし進められていくのにいささかでも抵抗するつもりで、私は同じアジアの生んだこの愛と人道の詩人の仕事を、あらためて紹介することにしたのであった。河出書房にいたM君が、当時はほとんど忘れ去られ無視されていたこの敵性国詩人の詩集をあえて引き受けて、出版の運びにまで持ち込んでくれたが、一二の詩編は、当時のきびしい検閲のためにカットしなければならなかったのを思い出す。」（山室…一六四）更に加えて「前の二つの詩集から代表的な作を大半拾うと共に、これまで未紹介だった詩をできるだけ多く収録することにした。（中略）ことに、とかく従来は単に甘美な抒情詩人ととられがちだったタゴールの、熱烈な愛国者ないしヒューマニストとしての面を伺わせる詩篇を、わりと数多く収めえたことは、きっと読者にも喜んでもらえるのではないかと思う。」（山室…一六四―五）この詩集一五〇篇中一八篇は『ギタンジャリ』の詩集から厳選されています。

一九五七年に角川書店により出版された二番目の翻訳について山室静は次のように述べてい

ます。「前者の大半にその後手にいれた「白鳥」などの詩集や、タゴール没後に出た「選詩集」からの数編を補い、詩人が最初に日本を訪れた時に東京帝大でした講演「日本へのメッセージ」を添えたものであった。これは幸いに歓迎されて、今でも屢々版を重ねている。」(山室・一六四)

一九八一年日本で出版されたタゴール著作集全一二巻の第一巻に森本達雄の翻訳が載っています。この翻訳は主にマクミラン版により出版された英語版をもとにしたものです。その同訳作品を収めたレグルス文庫の序文に、森本達雄は初めて『ギタンジャリ』に出会い、これを読んだ時の感情を次のように述べています。「そして、その第一歌の最初の一行に、誇張ではなく、決定的な衝撃を受けたのである。『おんみはわたしを限りないものになしたもうた―それがおんみの喜びなのです…』読みながら、稲妻にも似た不思議な感動の戦慄が、一瞬私の体内をつらぬき、身ぶるいしたことは、いまでも私は鮮明に記憶している。(中略)私は一編一編原文をノートに写しとっては、自分なりの拙い訳文をかきこんでいった。」(森本・五)

森本達雄はまた、このようにも語っています「この間私は、いくたびか詩集の翻訳をこころみた。それはけっして、出版目的としたものではなく(中略)翻訳作業をとおして、それぞれの作品にたいする自分なりの理解を深め、共感をたしかめるためであった。そんな翻訳の思い出でとりわけ懐かしいのは一九六四年から三年間、詩人がその後半生を過ごしたサンティニケトンに滞在できたときのそれである。」(森本・六) 森本達雄のサンティニケトン滞在はタゴールの思想、そしてベンガルの文化を彼の翻訳を通して日本の読者に正しく伝えるのに非常に活躍しました。

今回取り上げた四つの翻訳の中で渡辺照宏の訳だけは『ギタンジャリ』のベンガル語版から直接翻訳されたものです。渡辺照宏は『ギタンジャリ』の英語版も日本語に訳し、ベンガル語による韻文訳とともにこの本に収めています。

タゴールの詩の翻訳にあたって渡辺照宏はどのような方法を取ったかについて次のように語っています。『ギーターンジャリ』はなによりもまず吟誦し、唄うべきものです。原詩の形式をできるだけ保存し、行数はもちろん、各行の長さもだいたい元の通りにし、原詩曲のままに日本語でも唄えるように、とすることになると、私としては文語体をえらぶ他はありませんでした。古雅であると同時に大衆にもよくわかる言葉といえ、日本語では何に相当するでしょうか。私のは一つの試みに過ぎません。原詩の風格をそのまま日本の口語韻文に移す人がいずれ現れることを期待しながら、この拙い文語訳を世に送ります。」（渡辺…三八七）

さらに彼はこのように語っています。「詩の訳にあたって一番肝心な意味の取り方、つまり語学的理解という点では私の全力を尽くしたという以外には何も言えません。英訳のあるものでも細かい点では頼りにならず、結局のところ、主として三種のベンガル言語辞典に依りましたが、『ギーターンジャリ』の時期の作品の用例はどの辞典にもほとんどでていないので、自身の作製した用例カードによって帰納的に概念規定を確認した場合もかなりあります。大意や、特に問題になる個処についてはインドの友人に質問して説明してもらいました。」（渡辺…三八七―八）

翻訳に見られる尊崇の念―高良とみの場合

高良とみはタゴール詩集のあとがきにタゴールのことをグルデブと敬称で呼んで、当時起き

ていた世界大戦を批判するタゴールの考えを紹介しています。「平和を愛するあなたはそれに心を痛めて悲しんで欧州にもアジアにも幾度も幾度も武器の無益を叫んで旅して来られました。欧州でもアメリカでもわたくしは平和と真理の途を説いて旅するあなたにお逢いしました。中国を訪ねた帰りにあなたはふたたび日本に来られました。長崎から博多へ高島から六甲山へとわたくしは詩聖一行の道案内をし講演を通訳しました。あなたが日本への警告を繰り返す話すと軍国主義の人達は亡国の詩人が、とあざわらいました。」（高良…二九〇）

引き続き高良とみは「十九の娘は母となり、三人の娘の母となりました。そしていつの日か子供たちをタゴール先生の学園へ送りたいと心して育てました。戦いと敗戦と原爆は日本を暗黒につき落とし、末の娘は「春の雪」を遺して奪い去られ、次の娘は文学と詩の道をこころざし、上の娘はまだ見ぬインドを夢に描きあこがれのベンガールの風物を指し絵に描いてグルデブの百年祭に捧げてくれました。シャンティニケタンの日本庭園で楽団のシタールやビーナを奏で歌って私を見送って頂いてからあなたはジャスミンの花に埋もれて眠ってしまったわたし―戦いのさ中の昭和十六年八月七日。けれども神へのささげ歌「ギタンジャリ」は「生を愛するように慰めてくれる不思議な力となっています。私の悲しみ極らない死の影の谷間をさまよっていた日にも原爆の町角の闇の中を歩いていたときもあなたの詩は遙かな空からの声のように私といっしょに生きて導いてくれました。」（中略）

グルデブ・タゴール―偉大な先生、今はインドへ行ってもシャンティニケタンにもあなたのお姿はありません。（中略）あの澄ましんだやさしいお声も。私の髪もすでに白くなりました。世は移り変わります。けれども永遠の詩人であるあなたの美しい詩がこれからの世代の人たちに読まれる日のあれかしと生誕百年に当ってこの本を訳しました。私どもの一生の道しるべの

星となって今も光つづけるグルデブに心から感謝をこめてこの訳と絵を捧げます。」（高良…二九一―三）

高良とみはタゴールとの出逢い、そして『ギタンジャリ』を訳した目的についてこの本のあとがきに明確に描写しています。その文章は改めてタゴールの『ギタンジャリ』がいかに多くの日本人の心に共鳴したかを証明しています。しかし、当時彼の評価については勿論政治的な立場からの批判があったことも事実です。

終わりに

『ギタンジャリ』の翻訳にあたって日本の翻訳者たちが感じたタゴールの愛、人間性、慰め、強さ、そしてそれを正しく翻訳するための努力、このすべてのがタゴールの『ギタンジャリ』が日本人に対して与えた衝撃の大きさを物語っています。最後に、タゴールの作品を通して強められてきた印日関係の絆の素晴らしさにも注目したいと思います。国家を超えて人々の心に居所 (make a place) を作れる詩人タゴールが世界の詩人として知られるようになった理由はそのにあると思います。

（ビッショ・バロティ大学言語学部日本学科学科長）

プログレは終わったのか

入木田 浩 幸

最近、ロックミュージシャンの訃報が相次いでおり、ロックファンとしては心が痛いところ
です。

表題にあります「プログレ」とは、「プログレッシヴ・ロック」のことで、一九六〇年代後半にイギリスから発生したロック音楽のジャンルのひとつです。ビートルズのラストアルバム「アビー・ロード」を全英チャート第一位から引きずり下ろしたのが、キング・クリムゾン（以下「クリムゾン」）の一九六九年のデビューアルバム「クリムゾン・キングの宮殿」だったという話は聞いたことがあるかと思います。そのクリムゾン、ピンク・フロイド（以下「フロイド」）、イエス、エマーソン・レイク&パーマー（以下「EL&P」）、ジェネシスの五つのバンドは、プログレ五大バンドと言われています。

プログレとはどのような音楽か「何故に」「どこが」プログレッシヴ（前衛的・進歩的）なのか、一人のプログレファンの偏執狂的な観点から、プログレの音楽要素などについてお話し
たいと思います。一つ目は、演奏者の超絶技巧です。EL&Pのキース・エマーソンはハモンドオルガンを弾きながら下敷きになってみたり、反対側から弾いてみたり、挙句の果てにはナイフを鍵盤に突き刺して感電？したり、ピアノの弦部分をハープのようにかき鳴らしたりする
凄腕でした。イエスのリック・ウェイクマンはキーボード群を自分の周囲を取り囲むように配

置して、それらを自由自在に弾いています。プログレバンドは演奏者のその超絶技巧ゆえに、曲に変拍子や転調が多いのが特徴で、ライヴでもアルバムと同じように曲を再現しています。二つ目は、クラシックやジャズの音楽要素を取り入れていることです。特に、EL&Pは、クラシックの要素を強く取り入れています。「未開人」という曲では、バルトークのピアノ曲「アレグロ・バルバロ」を、「ナイフ・エッジ」という曲では、ヤナーチェクや、バッハを取り入れていますし、ムソルグスキーの「展覧会の絵」は、組曲全体をロックにアレンジしています。極め付きは、「タルカス」というアルバムで、プログレファンで作曲家の吉松隆氏が、逆に表題曲をクラシックのオーケストラ用に編曲しています。クリムゾンにおいては、ジャズの要素であるインプロヴィゼーションが演奏の核にもなっていますし、フロイドのキーボード奏者のリック・ライトは「狂気」のアルバム中の曲のコード進行はマイルス・デイビスから影響を受けたと語っています。クラシックやジャズの音楽要素を単にモチーフとして使うだけでなく、ロックにまで昇華している点が凄いと思います。三つ目は、アルバム自体がコンセプトアルバムになっていることです。ムーディー・ブルースの「デイズ・オブ・フューチャー・パスト」のアルバムが先駆けです。コンセプトアルバムは、曲が長尺になる傾向があり、当時はレコードの片面が、丸々一曲になっていることは当たり前でした。ジェネシスの最高傑作「幻惑のブロードウェイ」は、レコード2枚組で、九〇分強の間、物語が展開される作品で、全体を聴くだけで疲れてしまいます。四つ目は、当時の最先端の楽器や技術を駆使した音創りがされていることです。モーグシンセサイザーやメロトロンなど中でもメロトロンはプログレには必須の楽器です。メロトロンは、ストリングスなどのサンプル音源が録音された磁気テープを使用した鍵盤楽器で、通常のストリングスなどの生音に比べて、摩訶不思議で心地良い？音がし

ます。また、楽器類だけでなく、インタビュ音源や、様々な音がサンプリングされて使われています。ここで忘れてはならないのが、富田勲氏です。富田氏は、ドナウ川でのパフォーマンズといい、かなりプログレです。五つ目は、その影響力です。今まで申し上げてきたプログレの音楽要素は、色々な国のロックバンドに影響を与えています。それぞれの国に合うような形でその音楽要素が取り込まれて、个性的で特色のあるプログレバンドが各国に存在しています。また、前衛的な芸術活動にも影響を与えていて、例を挙げると世界的な舞踏カンパニーである山海塾は初期の頃にタンジェリン・ドリームの曲を使用したパフォーマンスを行っていました。

今までお話してきましたが、一九七〇年代中頃から衰退していきます。解散・再結成を繰り返したり、ポップ路線に方向転換したり、メンバーチェンジをしたりして、悲しいことに現在ではバンドは形骸化しています。レディオヘッドや、アイスランドのシガー・ロスなど、新しいバンドが現れている昨今、それらのバンドの曲を聴きながら、その中にプログレの要素を見つけては、「まだまだ、プログレは終わってないぞ!」と、一人ほくそ笑んだりしています。

最後に、四月の日本公演の直前に亡くなられたキース・エマーソン氏のご冥福をお祈りいたします。

(国際日本文化研究センター管理部総務課長)

センター通信

Japan Review 三〇号をむかえて（その二）

ジョン・グリーン

Japan Review（以下、JR）三〇号は年度内に出る。これは記念すべき節目である。三〇号は通常号ではなく、日本の「世俗」をテーマとする別冊の特集号として組んでいる。欧米の学者は近年「世俗とは何か」を盛んに議論しているが、議論の成果を近現代の日本に当てはめる試みはほとんどされてこなかった。*Formations of the secular in Japan*と題するこの特集は、その穴を少しでも埋める狙いをもつ。執筆陣はアメリカをはじめドイツ、オランダ、フランス、イタリア、ノルウェイ、オーストラリア、イギリスそして日本で活

躍中の研究者から構成されている。JRがこのような特集企画を開始したのは最近のことである。一弾目は、二〇一三年に刊行した春画の特集 *Shunga: sex and humor in Japanese art and literature* だった。かなりの好評をえたため継続的に出したと考えた。特集は二年に一度のペースで刊行するが、第三弾目の下準備にはもうすでに入っている。それは欧米で今話題となっている *War and tourism* がテーマで、刊行は二〇一八年に予定している。

学術雑誌の編集長の責任は重い。責任が多くある中で、その雑誌を常に進化させ、より広く読まれ、高く評価されるものにしていくのが最重要であろう。これら特集号は、筆者が編集長になってから導入した一つの「進化」である。JRの過去を振り返って見れば、一九九〇年の創刊号以来見間違え

るほど進化してきたことが分かる。時には、その進化が大胆な「飛躍」となってあらわれることもあった。編集長の交代が主な契機であった。鈴木貞美氏（日文研の名誉教授）が一九九八年に編集長になったことでJRが方向転換をなしたことがまず注目に値する。それまでは日本と一切関係のない論文さえ掲載され、研究論文の他にも“lectures”, “team research projects”, “notes”, “discussions”などなどのコーナーも設け、アイデンティティーの判然としない「紀要」であった。鈴木氏のおかげでJRが日本研究の学術雑誌として初めて「一人前」になったと言っても過言ではない。しっかりと査読制度が導入されたのも、鈴木時代である。

このようにして所内の紀要から国際的に認識され始める学術雑誌へと脱皮していったJRだが、その新しい方向を新たな自信をもって歩みだしたのは、二〇〇一年に編集長に就任したジム・バクスター氏である。（元日文研教授の）バクスター氏の遺産は大きい。一つは *Japan Review* is open to all authors という文言を氏が「執筆要項」に初めて挿入して明記したように、投稿資格は、もはや所内の先生方及び外国人研究員に限定しない、日本研究者ならだれにでも門戸を開く、という方向性である。さらに、査読はこれまで所内の先生方

を中心に行ってきたが、バクスター氏は所外へも適切な人材を探し査読を依頼することにした。そして当時は雑誌の体裁、文体上の乱れが色々指摘されていたのでその統一をはかったのもバクスター氏である。 *Chicago Manual of Style* をベースとした *Monumenta Nipponica* の文体をJRで活躍したこともまた大いに評価すべきである。

筆者は編集長に就任したのが二〇〇九年だが、鈴木・バクスター両氏の業績を踏まえながら微調整を何度か施してきた。以下それを簡単に紹介するが、なかでも所内の一部から強い抵抗に出会った微調整もあったことを記しておきたい。いずれにせよ、筆者の目的は一貫してJRをより良い雑誌、一流と認められる雑誌にするのが狙いであり続けてきた。まず手をつけたのは、見た目、体裁である。長年利用された薄緑の装丁をやめ、日文研図書館のデータベースから魅力的なイメージを選んで、それを表紙に貼り、衣替えを実現した。光沢のある紙をやめ、より読みやすい紙にし、フォントも変えた。そして文末注を脚注にした。他に、和文要旨を雑誌から外し、ウェブサイトに移した。以上のような体裁問題と関係のないところでも、JRの進化をあえて推し進めてきた。以下簡単に述べてみよう。

組織面では、存在していなかった編集小委員会を立ち上げた。必要に応じてJ Rの編集方針等について委員に相談することとした。広報面ではJ RをJSTORに登録した。JSTORは人文、社会などの学術雑誌のバックナンバーを、電子的に保存するデジタルアーカイブだが、J Rが広く認識されるのには登録が欠かせないものであった。内容面では、書評欄を導入して世界中のエキスパートに話題の日本研究書にメスを入れてもらうこととした。「研究ノート」も、貴重な資料の「英訳」もまた新しい企画である。最後に冒頭で紹介したように特集号も二〇一三年の導入であった。これで決して満足

できるわけではない。課題は多く残っている。投稿原稿の数が不足気味なので募集に更なる力を入れ、工夫をする必要がある。募集のためにも、Thomson ReutersのArts and Humanities Citation Indexにも、ScopusにもJ Rを載せてもらうことを狙っている。商業出版と何らかのタイアップができないかの検討をすることも大事かも知れない。J Rは日文研が英語圏に向ける「顔」でもあるため、常によりいいものにしていく責任を編集長の筆者は痛感している。

(国際日本文化研究センター教授)

共同研究

(二〇一五年一月一日～二〇一六年三月三十一日)

戦後日本文化再考

(研究代表者 坪井秀人、幹事 磯前順一)

〔共同研究者名〕

浅野麗、石川巧、岩崎稔、大原祐治、岡田秀則、辛島理人、狩俣真奈、川口隆行、北中淳子、北原恵、木村朗子、紅野謙介、高榮蘭、五味渕典嗣、斉藤綾子、佐藤泉、尹芷汐、塩野加織、島村輝、申知瑛、菅野優香、鈴木勝雄、張政傑、長志珠絵、十重田裕一、鳥羽耕史、戸邊秀明、成田龍一、朴貞蘭、橋本あゆみ、福岡良明、松原洋子、水川敬章、光石亜由美、美馬達哉、村上陽子、李承俊、鷺谷花、渡辺直紀、渡邊英理、沈熙燦、郭南燕、北浦寛之、石川肇、杉田智美、王莞晗、栄元、増田斎、田村美由紀

〔海外共同研究員名〕

酒井直樹、五十嵐恵邦、キャロル・グラック

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一五年一月二三日

共同研究会WG会議

李承俊、張政傑「読書会『敗戦と戦後のあいだで..遅れて

帰りし者たち』(筑摩選書、二〇一二)

基調講演 五十嵐恵邦

総合討論

〈第五回研究会〉

二〇一五年二月一二日

映画上映会及び個人発表

斉藤綾子「占領期からポスト占領期の映画におけるパンパ

ン表象―夜の女たちから基地の女たちへ」

二〇一五年一月一三日

個人発表

沈 熙燦「戦後日本における朝鮮史研究の軌跡とその齟齬
―旗田巍と小松川事件を事例に―」

パネル発表「沖縄をめぐる発話の行方」

戸邊秀明「一九五〇年代前半における『東京の沖縄』…在

日沖縄人の歴史から考える『戦後』

村上陽子「沖縄の被爆者…証言／表現をめぐる」

〈第六回研究会〉

二〇一六年三月五日

佐藤 泉「ナショナルリズム再考の時代」

来年度以降計画等打ち合わせ

二〇一六年三月六日

個人発表

朴 貞蘭「戦後韓国における歴史教育を批判する―国定
化、記念施設、体験学習を中心に―」

橋本あゆみ「戦後社会運動におけるヒロイズムの快楽／暴
力―大西巨人『犠牲の座標』改稿の諸相から」

光石亜由美「〈肉体〉から戦後を再考する―『肉体文学』

を中心に」

人文諸学の科学史的研究

（共同研究代表者 井上章一、幹事 瀧井一博）
〔共同研究員名〕

今谷明、上島享、上村敏文、鵜飼正樹、小澤実、斎藤成
也、内田忠賢、長田俊樹、小路田泰直、佐藤雄基、関幸
彦、高木博志、高谷知佳、竹村民郎、玉木俊明、鶴見太
郎、永岡崇、林淳、シルヴィオ・ヴィータ、藤原貞朗、安
田敏朗、若井敏明、荒木浩、伊東貴之、大塚英志、倉本一
宏

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一六年三月二七日

若井敏朗「英雄時代論争とは何だったのか」

荒木 浩「文学史からかえりみた英雄時代論」

上島 享「草創期京大の日本史学」

関 幸彦「石母田正の挑戦―アカデミズム史学との組み打
ち」

二〇一六年三月二八日

永岡 崇「歴史の語りと『現場』―民衆史の一断面」

上村敏文「後期水戸学とキリスト教」

安田敏朗「民科とスターリン言語学」

今谷 明「『国民的歴史学運動』のタブー化と私の史学入門」

高木博志「桑原武夫と井上清、それぞれの一九六〇年代における日本近代像」

竹村民郎・井上章一「明治絶対王制論をふりかえる」
討議（高木報告、竹村井上対談をめぐって）

戦争と鎮魂

（研究代表者 牛村 圭、幹事 ジョン・グリーン）

〔共同研究員名〕

岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川村覚文、川本玲子、金志映、栗原俊雄、古田島洋介、小堀馨子、佐伯順子、谷口幸代、竹村民郎、等松春夫、永井久美子、西原大輔、眞嶋亜有、吉井文美、吉田（古川）優貴、末木文美士、堀まどか、今泉宜子、稲賀繁美、倉本一宏、松田利彦、劉建輝、磯前順一、郭南燕、朴美貞、エヤル・ベンアリ、西田彰一、南直子

〔海外共同研究員名〕

徐載坤、平松隆円

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一五年一月一日

靖國神社遊就館見学、資料調査等

昇殿参拝

神職による講演（靖国会館）と境内諸施設の案内

二〇一六年一月六日

研究発表1

ベンアリ・エアル “Bringing Dead Soldiers to Rest in Peace:

The Japanese Case in Theoretical and Comparative

Perspective”

研究発表2

吉田優貴 「ケニアのナンディ社会における、死に方生き方

送り方」

二〇一六年三月二五日

研究発表1＋全員討議

イーゴリ・ボトーエフ…「ロシア文学における日露戦争の

記憶―『日本』の表象を中心に―」

研究発表2＋全員討議

金 志映「第二次大戦後のアジアにおける鎮魂と記憶の冷

戦―博士論文の報告を出発点として―」

研究会3年目の方針検討

説話文学と歴史史料の間に

(研究代表者 倉本一宏、幹事 榎本 渉)

〔共同研究員名〕

上野勝之、内田滂子、大橋直義、尾崎勇、追塩千尋、加藤友康、川上知里、木下華子、五月女肇志、佐藤信、関幸彦、曾根正人、多田伊織、蔦尾和宏、中村康夫、野上潤一、野本東生、樋口大祐、藤本孝一、古橋信孝、保立道久、前田雅之、松蘭斉、三舟隆之、山下克明、横田隆志、佐野愛子、小峯和明、呉座勇一、荒木浩、井上章一、中町美香子、谷口雄太、グエン・ヴー・クイン・ニュー

〔海外共同研究員名〕

グエン・ティ・オワイン、宋浣範、劉曉峰、魯成煥

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一五年一〇月一七日

曾根正人「平安初期仏教界と五台山―『日本霊異記』上巻

第五縁の五台山記事が持つ意味」

関 幸彦「説話三題―史学と文学の架け橋」

魯 成煥「越境する記紀伝承―慶北高霊の高天原祭を中心
に―」

藤本孝一「中世絵巻の鑑賞方法―信貴山縁起絵巻を中心に
―」

二〇一五年一〇月一八日

蔦尾和宏「『古事談』巻五巻頭話考」

多田伊織「古代仏教はだれのためのものか―言語から見る

『日本霊異記』」

山下克明「式神と陰陽師説話」

五月女肇志「『古今著聞集』と古記録」

〈第五回研究会〉

二〇一六年一月九日

榎本 渉「文書・日記・説話における高麗文宗請医事件」

野本東生「古今著聞集と文体」

佐藤 信「『出雲国風土記』の説話世界」

野上潤一「林羅山『本朝神社考』による説話の資料化とその
の享受について―羅山の学問と近世前期学問史における

る一展開をめぐって―」

二〇一六年一月一〇日

内田清子「『長谷寺験記』 享受の一端」

グエン・ヴー・クイン・ニュー「ベトナムの昔話に見られるモチーフ」

樋口大祐「慈光寺本『承久記』の視点について」

前田雅之「今昔物語集の享受から説話と歴史の関係を論ずる―本朝通鑑・近代国学・国文学・芥川龍之介―」

〈第六回研究会〉

二〇一六年三月五日

呉座勇一「北条義時追討院宣は実在したのか―慈光寺本『承久記』の再検討―」

松蘭 斉「藤原（九条）道家と説話世界」

加藤友康「古事談における古記録の抄録―貴族たちが共有した『世界』」

佐野愛子「越南本『粵甸（えつでん）幽霊集録』における皇帝像」

来年度以降の打ち合わせ

二〇一六年三月六日

木下華子「『発心集』蓮華城入水説話をめぐって」

中町美香子「今昔物語集の中の平安宮」

追塩千尋「老演をめぐる伝承と史実」

中村康夫「和歌と歴史―和歌説話とは何か―」

おたく文化と戦時下・戦後

（研究代表者 大塚英志、幹事 北浦寛之）

〔共同研究員名〕

浅野龍哉、板倉史明、内田力、香川雅信、菊地暁、キム・ジュニアン、木村智哉、嵯峨景子、富田美香、鶴見太郎、中川譲、藤岡洋、細馬宏通、牧野守、室井康成、山本忠宏、佐野明子、滝浪佑紀、山路亮輔、谷口恵太、近藤和都、鈴木麻記

〔海外共同研究員名〕

秦剛、堀ひかり、顔曉暉、キム・キュヒョン、マーク・スタインバーグ

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一五年一月二七日

キム・キュヒョン「戦後韓国少年マンガにおける植民地体験と民族アイデンティティの問題…コ・ウヨン（高

羽栄)の『大野望』を中心として」

堀ひかり「萩尾望都『マージナル』とアーシュラ・ルグイ
ンの『闇の左手』(フェミニストSF小説)における
クイア表象の比較」

嵯峨景子「新資料『女学校の制服』の書誌学的調査デー

タ・中間報告」

〈第五回研究会〉

二〇一六年三月一二日

佐野明子「一九二〇年代から占領期における日本アニメー

ション映画の身体表象」

富田美香「『桃太郎海の神兵』とドキュメンタリー映画」

斉 夢菲「ストーリーまんが表現における歴史叙述―石ノ

森章太郎『マンガ日本の歴史』を題材に」

日本の舞台芸術における身体 ―死と生、人形と人工体

(研究代表者 ボナヴェントゥーラ・ルペルティ、幹事 細

川周平)

〔共同研究員名〕

赤間亮、板谷徹、井上理恵、岩井眞實、梅山いつき、カ
ティア・チェントンツエ、菊地浩平、桜井圭介、佐藤恵

里、武井協三、竹本幹夫、土田牧子、中嶋謙昌、深澤昌
夫、藤井慎太郎、森下隆、山田和人、滝澤修身、橋本裕
之、李応寿

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一五年一月二九日

竹本幹夫「能・狂言における中世的身体」

中嶋謙昌「能の身体と詞章」

〈第三回研究会〉

二〇一六年一月二三日

赤間 亮「浮世絵は役者の身体をどのように記録したか」

土田牧子「歌舞伎音楽と歌舞伎の身体―黒御簾音楽と竹本

から探る―」

武井協三「初期歌舞伎の女方 今村久米之助について」

深澤昌夫「近松劇に見る人形的身体」

〈第四回研究会〉

二〇一六年三月一九日

板谷 徹「沖縄における身体の近代化―御冠船踊りから琉

球舞踊へ」

橋本裕之「鵜鳥神楽における神楽子の身構え」

山田和人「からくり人形における身体——からくり人形と手妻人形——」

菊地浩平「でくのぼうとしての初音ミク」
オープンディスプレイカッション

万国博覧会と人間の歴史——アジアを中心に

〔研究代表者 佐野真由子、幹事 井上章一〕

〔共同研究員名〕

石川敦子、市川文彦、伊藤奈保子、鵜飼敦子、江原規由、川口幸也、神田孝治、澤田裕二、寺本敬子、中牧弘允、芳賀徹、増山一成、武藤秀太郎、武藤夕佳里、岩田泰、橋爪紳也、林洋子、稲賀繁美、瀧井一博、ジョン・グリーン、劉建輝、朴美貞

〔海外共同研究員名〕

青木信夫、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、

徐蘇斌

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一五年一〇月一七日

論集刊行報告

現在と未来の万博をめぐる討論会

1) ミラノ万博について

2) 大阪万博誘致について 森栄子

国際研究集会等、今後の活動に関する打合せ

細川周平「大阪万博、感激の一〇日間」

二〇一五年一〇月一八日

岡本貴久子「平和記念東京博覧会からみる大正期の林業政策とその振興——帝国森林会の出品作をめぐる一考」

西 夏希「万国博覧会と佐野常民——慶応三（一八六七）年パリ博から明治六（一八七三）年ウィーン博へ」

王 莞晗「博覧会と修学旅行——一九一〇年の南洋勸業会を中心に」

葛西 周「明治期日本の万博への参加——楽器・音楽書等の音楽関連出品物を中心に」

範 麗雅「一九世紀万博の東洋観を打開した『ロンドンにおける中国芸術国際展覧会』（一九三五年）——瀧精一の中国美術紹介活動を中心に」

〈第四回研究会〉

国際研究集会

二〇一五年一二月一七日

武藤夕佳里「並河靖之と万国博覧会——並河七宝と巴里庭をめぐる人びと」

青木信夫「建築家劉既漂と中国における『新建築』の誕生

——パリ万博から西湖博覧会へ」

ウィーベ・カウテルト「景福宮から朝鮮博覧會場への空間変貌」

増山一成「幻の博覧都市計画——東京月島・日本万国博覧会」

石川敦子「資料から見るランカイ屋と装飾業の歴史」

澤田裕二「愛知万博前夜——博覧会の企画制作現場から」

二〇一五年一月一日

クラウス・ディートリッヒ「知識のグローバルネットワークへ——一八六〇～一九一〇年代の万国博覧会における日本の教育専門家たち」

ロバート・ヘリヤー「闘うティールーム——万博を舞台に、アメリカ市場を狙って繰り広げられた日英競争

一八九三～一九一七」

討論（コメンテーター…武藤秀太郎）

エドソン・G・カバルフィン「ポストコロニアル時代のアイデンティティ・ポリティクスと万国博のフィリピ

ン・パヴァリオン一九五八～一九九二」

マヌエラ・チオッティ「実質と表象——万国博と現代美術展におけるインド」

討論（コメンテーター…川口幸也）

クリスチーネ・グレイネル「一九二二年リオ・デ・ジャネイロにおける独立百年記念国際博覧会——植民地主義から『食人』まで」

喬 兆紅「近代中国の博覧会の歩みにおける政府の働き

（一九〇九～一九四九）」

討論（コメンテーター…ジラルデッリ青木美由紀）

二〇一五年一月一日

総合討論（コメンテーター…ユク・ヨンス、徐蘇斌、寺本敬子）

公開講演会「アジアの万博」

基調講演 堺屋太一

基調講演 呉建民

座談 堺屋太一、呉建民、橋爪紳也、江原規由

二〇一五年一月二〇日

テーマ・ツアー「博覧会と京都の近代」

京都御苑、閑院宮邸、富小路広場（旧常設博覧会場）、平

安神宮、岡崎公園内（第四回内国勸業博覧会跡地）みやこめっせ（京都市勸業館）、京都伝統産業ふれあい館、並河靖之七宝記念館、本家八ッ橋西尾株式会社、光峯錦織工房

二〇一六年二月二七日

全員討論① 国際研究集会を振り返って

三宅悠有「イタリアで万博日本館運営業務を垣間見る」

二〇一六年二月二八日

全員討論② 共同研究論集『万国博覧会と人間の歴史』、それぞれの読み方

植民地帝国日本における知と権力

（研究代表者 松田利彦、幹事 瀧井一博）

〔共同研究員名〕

飯島渉、岡崎まゆみ、小野容照、加藤聖文、加藤道也、河原林直人、川瀬貴也、栗原純、愼蒼健、通堂あゆみ、アルノ・ナンタ、春山明哲、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつし、長沢一恵、李昇燁、中生勝美、稲賀繁美、劉建輝、歐素瑛、李容相

〔海外共同研究員名〕

陳延媛、李炯植、洪宗郁、山本浄邦

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

国際日本文化研究センター共同研究班「植民地帝国日本における知と権力」・中央研究院台湾史研究所共催ワークショップ

二〇一五年一〇月二六日

中生勝美「日本植民地の旧慣調査…政策的意図と歴史背景」
李容相「朝鮮鉄道の満鉄委託と官僚」

通堂あゆみ「終戦後の学位授与―『外地』帝国大学閉校過程の一側面」

鄭駿永「犯罪者の身体、朝鮮人の精神…京城帝大精神医学教室の西大門刑務所研究」

松田利彦「ロックフェラー財団と植民地朝鮮の医療衛生改革構想―京城帝国大学医学部長志賀潔との交渉を中心に」

二〇一五年一〇月二七日

曾文亮「植民地台湾における法律家とその家族旧慣に対する研究」

岡崎まゆみ「内地人法律実務家の朝鮮認識―家族制度への

まなざし」

李 炯植「戦後朝鮮統治関係者の朝鮮統治史編纂―友邦協会を中心」

呉 叡人「Monument of the Vanishing?: The Elegiac Metamorphosis of Taiwanese Nationalism in the Late Colonial Period (1937-1945)」

総合討論

二〇一五年一〇月二八日

エクスカーショ

総統府、国史館總統副總統文物館（旧臺灣總督府交通局）、台北二二八紀念館（旧臺北放送局）、紀州庵（旧日本料理屋）

〈第四回研究会〉

二〇一五年一二月一九日

栄 元「植民地日本語新聞の事業活動―大連・満洲日日新聞社による艦隊便乗見学をめぐって」

何 義麟「台湾における近代性と民族性の葛藤―作曲家鄧雨賢の人物像を中心として」

春山明哲「岡松参太郎にとっての台湾社会と法―統治・ジェンダー・人類」

陳 延媛「植民地統治末期台湾における性病管理」

韓国翰林大学校との共催ワーキングショップについての打ち合わせ

二〇一五年一二月二〇日

宮崎聖子「在台日本人 田中一二の妻、きわのの活動について」

李 容相「有吉忠一の活動と内面」

長沢一恵「植民地朝鮮における『社会課』設置と社会政策」

宋 炳卷「崔虎鎮の韓国經濟史と東洋社会論」

〈第五回研究会〉

二〇一六年二月二〇日

李 炯植「京城日報・毎日申報社長時代（一九一四年八月―一九一八年六月）の阿部充家」

愼 蒼健「植民地『産学官』連携体制の構築―植民地朝鮮における人蔘をめぐって」

紀 旭峰「『進学ルートの不連続』からみた戦前期台湾人の『日本留学』」

栗原 純「台湾阿片令の改正と新特許問題」

韓国翰林大学校との共催シンポについての打ち合わせ／次年度報告順の決定

二〇一六年二月二日

小野容照「李達の転向―東アジア思想空間の一断面」

鄭 駿永「『満州建国大学』という実験と六堂崔南善」

川瀬貴也「植民地朝鮮の日朝仏教の交流」

小林善帆「いけ花とコッコジ（韓国いけ花）―帝国日本の

連続と非連続」

明治日本の比較文明史的考察―その遺産の再考―

（研究代表者 瀧井一博、幹事 牛村 圭）

〔共同研究員名〕

五百旗頭薫、岩谷十郎、植村和秀、大川真、小川原正道、

勝部眞人、加藤雄三、國分典子、塩出浩之、島田幸典、清

水唯一朗、谷川穰、永井史男、長尾龍一、中村尚史、福岡

万里子、前田勉、松田宏一郎、山田央子、岡本貴久子、浅

見雅男、上野景文、今野元、大久保健晴、奈良岡聰智、林

洋子、ジョン・ブリーン、佐野真由子

〔海外共同研究員名〕

ハラルド・フース、アリスティア・スウェール

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一五年二月四日

アリスティア・スウェール「文明開化と大衆メディア―東京

絵入り新聞を中心に」

ケヴィン・ドーク「明治維新の遺産としてのプロテスタン

ティズム・田中耕太郎と南原繁の論争」

二〇一五年二月五日

ハラルド・フース「Endemic Violence, Global Arms Trade

and the Meiji Restoration」

中村尚史「日本鉄道業形成の国際的契機―『海をわたる機

関車』によせて―」

〈第六回研究会〉

二〇一六年一月二三日

ジョン・ブリーン「近代の宮中儀礼…天皇に求められた政

治」

福岡万里子「プロイセン東アジア遠征と幕末外交―日本・

中国・シヤムの三点比較へ向けて」

二〇一六年一月二四日

大川 真「幕末日本のデモクラシー受容」

瀧井一博「『知識交換』の明治―渡辺洪基の生涯と思想―」

マンガ・アニメで日本研究

(研究代表者 山田奨治、幹事 荒木 浩)

[共同研究員名]

飯倉義之、石田佐恵子、伊藤遊、岩井茂樹、岡本健、金水敏、白石さや、西村大志、山中千恵、山本冴里、油井清光、横濱雄二、吉村和真、高馬京子、谷川建司、安井眞奈美、北浦寛之、宮崎康子、小泉友則

[研究発表]

〈第四回研究会〉

二〇一五年十二月一九日

作品検討 (『文豪ストレイドッグス』ほか)

紹介者…飯倉義之

作品検討 (『食の軍師』『花のズボラ飯』ほか)

紹介者…西村大志

二〇一五年十二月二〇日

作品検討 (『孤独のグルメ』)

紹介者…横濱雄二

〈第五回研究会〉

二〇一六年三月一二日

作品検討 (『7seeds』)

紹介者…宮崎康子

作品検討 (『くるねこ』)

紹介者…石田佐恵子

二〇一六年三月一二日

締めくくりの討論

新大陸の日系移民の歴史と文化

(研究代表者 細川周平、幹事 瀧井一博)

[共同研究員名]

赤木妙子、アンジェロ・イシ、一政(野村)史織、桑井輝子、小嶋茂、佐々木剛二、スエヨシ・アナ、高木(北山)眞理子、高橋勝幸、滝田祥子、根川幸男、日比嘉高、フェリッペ・アウグスト・ソアレス・モッタ、松岡秀明、物部ひろみ、森本豊富、守屋貴嗣、守屋友江、柳田利夫、吉田裕美、早稲田みな子、栗山新也

[海外共同研究員名]

エドワード・マック、森幸一

[研究発表]

〈第二回研究会〉

二〇一五年十一月二三日

報告書出版に向けての打ち合わせ（全員討議）

（文責：研究協力課）

基礎領域研究

韓国語運用の応用（継続）

代表者 松田利彦

概要 研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

日本近代まんが史概論（新規）

代表者 大塚英志

概要 サブカルチャー領域の研究を希望するこの分野の初心者に近代まんが史の初歩的な常識を概説する。

古記録学基礎研究（新規）

代表者 倉本一宏

概要 日本前近代の根幹的史料である古記録の解読を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。大学院生・教職員・他大学の院生・研究者の参加も歓迎する。

フランス語運用の基礎／応用（継続）

代表者 稲賀繁美

概要 フランス語の運用の基礎を実践的に訓練し、あわせて必要に応じて論文講読、仏文論文作成の手ほどきをする。

中世文学講読（継続）

代表者 荒木 浩

概要 中世文学の影印本の読解を軸に、古典テキストの研究方法を考察する。

文学・文化史理論入門（新規）

代表者 坪井秀人

概要 文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテキストの読解・分析の実践的方法を修得する。

彙報

(平成二七年一〇月一日)

平成二八年三月三十一日

人事異動

◎平成二七年一〇月一日 契約

(特任研究員)

特任助教 古川綾子

◎平成二七年一二月三十一日 契約期間満了

(客員)

外国人研究員 高 文勝(天津師範大学教授)

外国人研究員 ケビン・ドーク(ジョージタ

ウン大学教授)

外国人研究員 リチャード・トランス(オハ

イオ州立大学教授)

◎平成二八年一月一日 契約

(客員)

外国人研究員 姜 龍範(天津外国語大学教

授)

◎平成二八年一月三十一日 契約期間満了

(客員)

外国人研究員 李 容相(又松大学教授)

◎平成二八年二月一日 契約

(客員)

外国人研究員 周 閱(北京語言大学教授)

外国人研究員 マティアス・ハイエク(パリ・

デイドロ大学准教授)

◎平成二八年二月二十九日 契約期間満了

(客員)

外国人研究員 韓 錫政(東亜大学校教授)

◎平成二八年三月三十一日 定年退職

准教授 光田和伸

◎平成二八年三月三十一日 契約満了

(特任研究員)

特任助教 宮崎康子

◎平成二八年三月三十一日 併任解除

副所長 井上章一

研究調整主幹 荒木 浩

◎平成二八年三月三十一日 任期満了退職

機関研究員 石川 肇

◎平成二八年三月三十一日 契約期間満了

(客員)

外国人研究員 マヤ・ケリアン(ブルガリア

科学アカデミー教授)

外国人研究員 モニル・ホサイン・モニ(ア

ジア太平洋世界研究所グローバル日本研究

プログラム研究准教授)

外国人研究員 張 寅性(ソウル大学校教授)

外国人研究員 エヤル・ベンアリ(キネレット

大学社会安全保障センター所長)

日文研フォーラム

第二九三回「平成二七年一〇月一三日(火)」

発表者 ケビン・ドーク(ジョージタウン大

学教授/日文研外国人研究員)

テーマ 法と教養と文化の基礎——田中耕太

郎にならって

コメンテーター 瀧井一博教授

第二九四回「平成二七年一月一七日(火)」

発表者 李 容相(又松大学教授/日文研外

国人研究員)

テーマ 鉄道から見た東アジアの歴史

コメンテーター 松田利彦教授

第二九五回「平成二七年一月一日（火）」

発表者 高 文勝（天津師範大学教授／日文

研外国人研究員）

テーマ 日中両国はどう付き合うべきか――

王正廷の「王道・霸道」論から考える

コメンテーター 山田辰雄（慶應義塾大学名

誉教授）

第二九六回「平成二八年一月五日（火）」

発表者 アグネセ・ハイジマ（ラトビア大学

准教授／日文研外来研究員）

テーマ 日本美術に見るユーモア――河鍋曉

斎の動物戯画と暁斎が笑った明治の西洋化

コメンテーター 荒木 浩教授

第二九七回「平成二八年二月一九日（金）」

発表者 イーゴリ・ボトーフ（ブリヤート

国立大学准教授／日文研外国人研究員）

テーマ ロシア文学における日露戦争の記憶

――「日本」の表象を中心に

コメンテーター 牛村 圭教授

第二九八回「平成二八年三月八日（火）」

発表者 張 寅性（ソウル大学校教授／日文

研外国人研究員）

テーマ 「近代の宿命」と「保守」――福田

恆存の保守主義を考える

コメンテーター 米原 謙（中国人民大学講

座教授・元大阪大学教授）、瀧井一博教授

木曜セミナー

第二二一回「平成二七年一〇月二二日（木）」

話 者 杉田智美機関研究員

テーマ 小泉鉄、〈台湾〉を表象する

第二二二回「平成二七年十一月一九日（木）」

話 者 フレデリック・クレインズ准教授、

シンティア・フィアレ（ライデン大学史学

研究所研究員／日文研外来研究員）

テーマ 平戸オランダ商館文書が語るもの

第二二三回「平成二七年十二月一七日（木）」

話 者 佐野真由子准教授、井上章一副所長、

中牧弘允（吹田市立博物館館長）

テーマ 万国博覧会から人間の歴史を考える

第二二四回「平成二八年一月二一日（木）」

話 者 佐々木弘明（京表具翠光堂主人）

テーマ 表具ができるまで

第二二五回「平成二八年二月一八日（木）」

話 者 古川綾子特任助教

テーマ 上方演芸の近代史と現状

Nichibunken Evening Seminar

第二〇一回「平成二七年一〇月八日（木）」

発表者 マヤ・ケリヤン（ブルガリア科学ア

カデミー教授／日文研外国人研究員）

テーマ Japanese Local Community: Structures,

Characteristics, and Resources

第二〇二回「平成二七年十一月五日（木）」

発表者 一瀬陽子（大阪府立長尾高等学校非

常勤講師）

テーマ Tsuda Sokichi's View of Cultural

Development: Japanese Literary History

Rewritten in the Postwar Period

第二〇三回「平成二七年十二月三日（木）」

発表者 セシル・ラリ（パリ・ソルボンナ大

学極東研究センター博士研究員／日文研外来研究員)

テーマ The Flying Octopus Story: Japanese Traditional Kite Culture and Its People

第二〇四回「平成二八年二月二日(火)」

発表者 アグネセ・ハイジマ (ラトビア大学准教授／日文研外来研究員)

テーマ Shichitukujin: Seven Gods of Good Luck and Humor in Japanese Religious Painting

第二〇五回「平成二八年三月三日(木)」

発表者 エヤル・ベンアリ (キネレット大学社会安全保障センター所長／日文研外国人研究員)

テーマ Tanoshikatta ne? Learning to be Happy in Japanese Preschools

学術講演会

第六一回「平成二八年三月一四日(月)」

講演者 楠 綾子准教授

テーマ 吉田・鳩山・岸の時代―一九五〇年

代の日本外交

講演者 光田和伸准教授

テーマ 神々は出雲に帰る―「邪馬台国」と『水底の歌』に及ぶ

司会 荒木 浩教授

日文研・アイハウス連携フォーラム

第六回「平成二七年一月一〇日(木)」

講演者 李愛淑 (国立韓国放送通信大学教授／日文研外国人研究員)

テーマ 世界文学としての『源氏物語』

第七回「平成二八年二月一〇日(水)」

講演者 ボナヴェントゥーラ・ルペルティ (カ・フォスカリ大学教授／日文研外国人研究員)

テーマ イタリア演劇から見た日本の伝統演劇

能、歌舞伎、オペラ、バレエ―「狂乱」ものを中心に―

一般公開

「平成二七年一〇月二九日(木)」

【戦後七〇年を迎えて―「第一部」徹底討論…〈戦後〉をどう考えるか】

提題 磯前順一教授、牛村 圭教授、韓錫政 (東亜大学校教授／日文研外国人研究員)

司会兼提題 坪井秀人教授

【戦後七〇年を迎えて―「第二部」私の戦後・京都の戦後―現在、未来へのメッセージ】

講師 梅原猛顧問、小松和彦所長、井上章一副所長

司会 伊東貴之教授

国際研究集会

第四八回「平成二七年十二月一七日(木)」

二〇日(日)」

テーマ 万国博覧会と人間の歴史

研究代表者 佐野真由子准教授

第四九回「平成二八年二月一九日(金)」

二一日(日)」

テーマ 「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍

化の試みー

研究代表者 伊東貴之教授

公開講演会

〔平成二七年二月一九日（土）〕

テーマ アジアの万博

講演者 堺屋太一（作家／元国務大臣経済企

画庁長官）、吳 建民（博覧会国際事務局

名誉議長／元駐仏中国大使／中国外交学院

院長）

司 会 佐野真由子准教授

海外シンポジウム

〔平成二七年二月一三日（金）〕

テーマ 失われた二〇年と日本社会の変容

（第二部）

場 所 ハーバード大学（ボストン アメリ

カ）

代表者 瀧井一博教授

シンポジウム

第一二七回〔平成二七年一月二〇日（金）〕

主宰者 郭 南燕准教授

テーマ ドイツにおける日本文学の研究

第一二八回〔平成二七年一月二八日（土）

〕二九日（日）〕

主宰者 磯前順一教授

テーマ 鎮魂・翻訳・記憶ー声にならない他

者の声を聴く

第一二九回〔平成二八年二月九日（火）〕

主宰者 山田奨治教授

テーマ CM研究の展開と発展 日文研共同

研究からの一〇年

第一三〇回〔平成二八年二月二七日（土）

〕二八日（日）〕

主宰者 パトリシア・フィスター教授

テーマ 翻訳の再評価…学問を深める原動力

レクチャー

第一四七回〔平成二八年三月一八日（金）〕

発表者 イネス・ズバノブ（フランス国立科

学研究センター シニア・フェロー）

テーマ Global Mission: Catholic Imperial and

Spiritual Networks in India and beyond

(16th-18th c.)

主宰者 磯前順一教授、フレデリック・クレ

インス准教授

会議

運営会議

第三九回 平成二七年 二月二一日（金）

第四〇回 平成二八年 三月二一日（金）

調整会議

第二四一回 平成二七年 一〇月 七日（水）

第二四二回 平成二七年 一〇月二一日（水）

第二四三回 平成二七年 十一月 四日（水）

第二四四回 平成二七年 十一月一七日（火）

第二四五回 平成二七年 十二月 二日（水）

第二四六回 平成二七年 十二月一六日（水）

第二四七回 平成二八年 一月 六日（水）

第二四八回 平成二八年 一月二〇日（水）

第二四九回 平成二八年 二月 三日(水)
 第二五〇回 平成二八年 二月 二七日(水)
 第二五一回 平成二八年 三月 二日(水)
 第二五二回 平成二八年 三月 一六日(水)
センター会議

第二四一回 平成二七年 一〇月 八日(木)
 第二四二回 平成二七年 一〇月 二二日(木)
 第二四三回 平成二七年 一月 五日(木)
 第二四四回 平成二七年 一月 一九日(木)
 第二四五回 平成二七年 二月 三日(木)
 第二四六回 平成二七年 二月 一七日(木)
 第二四七回 平成二八年 一月 七日(木)
 第二四八回 平成二八年 一月 二一日(木)
 第二四九回 平成二八年 二月 四日(木)
 第二五〇回 平成二八年 二月 一八日(木)
 第二五一回 平成二八年 三月 三日(木)
 第二五二回 平成二八年 三月 一七日(木)

外国人来訪者

平成二七年一〇月八日 アブル・バルカット
 (ダッカ大学 日本研究センター教授)

平成二七年一月二日 国際交流基金関西国
 際センター・平成二七年度専門日本語研修
 一行

海外渡航

倉本一宏 教授

目的 ベトナム社会科学学院附属東北アジア

研究所日本研究センターにて講義

目的国 ベトナム

期間 平成二七年一〇月三日～一日

稲賀繁美 教授

目的 MAISON GLAD JEJUにて学会参加、

発表及び機関訪問

目的国 韓国

期間 平成二七年一〇月一五日～一八日

松田利彦 教授

目的 中央研究院、中華民国總統府及び国

史館總統副總統文物館等にて学会参加、発

表及び情報収集、資料収集

目的国 台湾

期間 平成二七年一〇月二三日～二八日

大塚英志 教授

目的 北京日本学研究センター、北京電影

学院にてシンポジウム及びワークショップ

参加、講義

目的国 中国

期間 平成二七年一〇月二三日～三一日

荒木浩 教授

目的 ソフィア大学にて学会参加

目的国 ブルガリア

期間 平成二七年一〇月二六日～一月二

日

細川周平 教授

目的 武漢音楽学院、北京師範大学にて講

演、研究打合せ及びシンポジウム参加、発

表

目的国 中国

期間 平成二七年一月一日～八日

榎本 渉 准教授

目的 浙江工商大学、護聖万寿禅寺及び嘉

興博物館等にてシンポジウム参加、現地調

査及び資料調査

目的国	中国	期間	平成二七年一月五日～一五日
荒木 浩	教授	目的	北京師範大学にてシンポジウム参加
目的国	中国	期間	平成二七年一月六日～一月八日
倉本一宏	教授	目的	西南財經大学、三星堆遺跡及び金沙遺跡にて講演、現地調査
目的国	中国	期間	平成二七年一月七日～一二日
坪井秀人	教授	目的	ベルリン州立図書館、ベルリン自由大学及びライプツィヒ大学にて資料調査、研究打合せ及びワークショップ参加
目的国	ドイツ	期間	平成二七年一月一〇日～一七日
山田奨治	教授	目的	ハーバード大学にてシンポジウム参加
目的国	アメリカ	期間	平成二七年一月一〇日～一五日
井上章一	副所長	目的	ハーバード大学にてシンポジウム参加
目的国	アメリカ	期間	平成二七年一月一日～一六日
瀧井一博	教授	目的	ハーバード大学にてシンポジウム参加
目的国	アメリカ	期間	平成二七年一月一日～一六日
郭 南燕	准教授	目的	ハーバード大学にてシンポジウム参加
目的国	アメリカ	期間	平成二七年一月一日～一六日
楠 綾子	准教授	目的	ハーバード大学、国立公文書館及び議会図書館等にてシンポジウム参加、発表及び資料調査
目的国	アメリカ	期間	平成二七年一月二〇日～二五日
北浦寛之	助教	目的	ハーバード大学にてシンポジウム参加
目的国	アメリカ	期間	平成二七年一月一日～二二日
稲賀繁美	教授	目的	ハーバード大学にてシンポジウム参加
目的国	アメリカ	期間	平成二七年一月一日～一六日
劉 建輝	教授	目的	内蒙古大学、北京大学にてシンポジウム参加及び講演
目的国	中国	期間	平成二七年一月一八日～二四日
パトリシア・フィスター	教授	目的	ハイアットトリジェンシアアトランタホテルにて学会参加
目的国	アメリカ	期間	平成二七年一月二〇日～二五日

郭 南燕 准教授

目的 上海図書館、St. Dominic's Church Museum 及び Macao Museum 等にて資料調査

目的国 中国

期間 平成二七年一月二二日～一二月四日

日

山田奨治 教授

目的 韓国著作権局にて研究打合せ

目的国 韓国

期間 平成二七年一月二八日～一二月一日

日

大塚英志 教授

目的 メキシコ国立自治大学、メキシコ国立映画センター及びメキシコ大学院大学にて講義、総研大広報活動

目的国 メキシコ

期間 平成二七年一月二九日～一二月六日

日

小松和彦 所長

目的 ストラスブール大学にてシンポジウム参加及び発表

ム参加及び発表

目的国 フランス

期間 平成二七年一月二二日～一二月六日

坪井秀人 教授

目的 コロンビア大学、ニューヨーク大学にてワークショップ参加

目的国 アメリカ

期間 平成二七年一月一五日～二二日

榎本 渉 准教授

目的 膠南博物館、青島市博物館及び威海市博物館等にて史料調査、現地調査

目的国 中国

期間 平成二八年一月一三日～一九日

石上阿希 特任助教

目的 ホノルル美術館にて資料調査

目的国 アメリカ

期間 平成二八年一月一七日～二四日

松田利彦 教授

目的 誠信女子大学校、利川市立博物館及び国立利川護国院等にて講演、資料収集及び施設見学

目的国 韓国

期間 平成二八年二月一二日～一五日

楠 綾子 准教授

目的 シェフィールド大学、エディンバラ大学及び IIEA 等にて講演、研究打合せ

目的国 イギリス、スコットランド、アイルランド

ランド

期間 平成二八年二月二三日～三月一日

宮崎康子 特任助教

目的 ソウル国立大学にて学会参加及び司会

会

目的国 韓国

期間 平成二八年二月二五日～二八日

パトリシア・フィスター 教授

目的 ピッツバーグ大学にてワークショップ参加及び発表

プ参加及び発表

目的国 アメリカ

期間 平成二八年三月三日～九日

小松和彦 所長

目的 在ローマ日本文化会館、ルッカ漫画博物館及びヴェネツィア大学等にて現地調

査、ワークショップ開催

目的国 イタリア

期間 平成二八年三月四日～一〇日

井上章一 副所長

目的 在ローマ日本文化会館、ルッカ漫画

博物館及びヴェネツィア大学等にて現地調

査、ワークショップ開催

目的国 イタリア

期間 平成二八年三月四日～一〇日

稲賀繁美 教授

目的 在ローマ日本文化会館、ルッカ漫画

博物館及びヴェネツィア大学等にて現地調

査、ワークショップ開催

目的国 イタリア

期間 平成二八年三月四日～一〇日

荒木 浩 教授

目的 在ローマ日本文化会館、ルッカ漫画

博物館及びヴェネツィア大学等にて現地調

査、ワークショップ開催

目的国 イタリア

期間 平成二八年三月四日～一〇日

劉 建輝 教授

目的 在ローマ日本文化会館、ルッカ漫画

博物館及びヴェネツィア大学等にて現地調

査、ワークショップ開催

目的国 イタリア

期間 平成二八年三月四日～一〇日

山田奨治 教授

目的 ヴェネツィア大学及びミラノ漫画博

物館等にて現地調査、ワークショップ開催

目的国 イタリア

期間 平成二八年三月五日～一〇日

佐野真由子 准教授

目的 London Metropolitan Archives、Royal

College of Physicians 及び British Library 等

にて資料調査

目的国 イギリス

期間 平成二八年三月八日～二一日

坪井秀人 教授

目的 南開大学、中国社会科学院及び旧鶴

崗炭坑にてシンポジウム参加

目的国 中国

期間 平成二八年三月一二日～二一日

大塚英志 教授

目的 Paris Expo Porte de Versailles にて現

地調査

目的国 フランス

期間 平成二八年三月一五日～一九日

宮崎康子 特任助教

目的 ニューヨーク大学、シェラトンセン

タートロントホテルにて資料調査、研究打

合せ及び学会参加

目的国 アメリカ、カナダ

期間 平成二八年三月一五日～二二日

荒木 浩 教授

目的 カリフォルニア大学ロサンゼルス校

にてシンポジウム参加及び発表

目的国 アメリカ

期間 平成二八年三月一六日～二一日

小松和彦 所長

目的 南開大学にてシンポジウム参加

目的国 中国

期間 平成二八年三月一七日～二一日

大塚英志 教授

目的 貴州大学外国語学院及び雲南大学外国語学院にて講演

目的国 中国

期間 平成二八年三月二四日～三一日

楠綾子 准教授

目的 フィリピン国立図書館、フィリピン空軍博物館等にて資料調査及び資料収集

目的国 フィリピン

期間 平成二八年三月二五日～二八日

ジョン・ブリーン 教授

目的 ワシントン大学、シェラトンシアトルホテル及びワシントン州コンベンションセンターにて会議出席

目的国 アメリカ

期間 平成二八年三月二九日～四月四日

坪井秀人 教授

目的 シェラトンシアトルホテル、ワシントン州コンベンションセンターにて会議出席

目的国 アメリカ

期間 平成二八年三月三〇日～四月五日

倉本一宏 教授

目的 シェラトンシアトルホテル、ワシントン州コンベンションセンターにて会議出席

目的国 アメリカ

期間 平成二八年三月三〇日～四月七日

目的国 アメリカ

期間 平成二八年三月三〇日～四月七日

山田奨治 教授

目的 シェラトンシアトルホテル、ワシントン州コンベンションセンターにて会議出席

目的国 アメリカ

期間 平成二八年三月三〇日～四月五日

パトリシア・フィスター 教授

目的 シェラトンシアトルホテル、ワシントン州コンベンションセンターにて会議出席

目的国 アメリカ

期間 平成二八年三月三〇日～四月五日

目的国 アメリカ

期間 平成二八年三月三〇日～四月五日

所員活動一覽（二〇一五年一月一日～二〇一六年三月三十一日）

荒木 浩

●著書

神崎宣武・白幡洋三郎・井上章一編『日本文化事典』（共著、編集協力・項目執筆）丸善出版 二〇一六年一月 七七〇頁

●その他の執筆活動

「書評 森正人著『古代説話集の生成』『説話文学研究』五〇号 二〇一五年一〇月 一六九～一七二頁

「特集 初夢を見る―夢の解釈、その歴史」『てんとう虫』第六一五号、『Express』四八巻一号 株式会社アダック 二〇一六年一月一日 二四～二七頁

石上阿希

●著書

『へんてこな春画』青幻舎 二〇一六年二月 一九二頁

●論文

「中国養生書と艶本―『黄素妙論』の受容を中心に―」武田科学振興財団杏雨書屋編『曲直瀬道三と近世日本医療社会』武田科学振興財団 二〇一五年一〇月 七二一～七三三頁

「艶本・春画の享受者たち」国文学研究資料館編『アジア遊学一九五 もう一つの日本文学史』勉誠出版 二〇一六年三月 一三二～一四八頁

●その他の執筆活動

「解説 Q & Aで解説！ 春画を楽しむための基礎知識」『美術手帖』二〇一五年一〇月号

「識者評論 国内初の本格春画展」共同通信社配信（各地方紙掲載） 二〇一五年一〇月

「インタビュー 注目株やってみなはれ」『朝日新聞』（大阪版・夕刊） 二〇一五年一〇月二二日

「解説 見かたを知れば、女性も楽しめます 話題沸騰! 春画の世界へようこそ」『婦人公論』二〇一五年一月二四日号

「対談 なぜいま春画がブームなのか(細川護熙、浦上満と)」『文藝春秋』二〇一五年一月号

「対談 春画の学際性をめぐって(橋本順光、矢野明子と)」『ヴィクトリア朝文化研究』一三号 二〇一五年一月
もとめにおうじて

「応 需—春画・艶本の趣向」『週刊読書人 増刊号 PONTTO』第四号 二〇一五年二月

「インタビュー 文化 『へんてこな春画』を出版 石上阿希さん」『東京新聞』(夕刊) 二〇一六年三月二二日

磯前順一

●著書

『죽은 자들의 응성임: 한 인문학자가 생각하는 3.11 대재난 이후의 삶』 장윤선 옮김 글항아리 (『死者たちのざわめきある人文学者が考える』)

3.11 大災難以後の生』ソウル: グルハンアリ 張ユンソン) 二〇一六年三月 三〇七頁

『근대 일본의 종교 담론과 계보—종교·국가·신도』 논형출판사 제점속 옮김 (『近代日本の宗教言説とその系譜—宗教・国家・神道』ソウル: ノンヒョン出版社 諸点淑訳) 二〇一六年三月 四八八頁

『他者論的転回 宗教と公共空間』(川村寛文共編) ナカニシヤ出版 二〇一六年三月 三九〇頁

●論文

「暗い時代に—石母田正『中世的世界の形成』と戦後歴史学の起源—」『アリーナ 2015』第一八号 中部大学 二〇一五年一月 一四一—一八一頁

“Epilogue: Reimagining Early Modern Japan—Beyond the Imagined/Invented Modern Nation,” in Peter Nosco, James Ketelaar, and Yasunori Kojima, eds. *Values, Identity, and Equality in Eighteenth- and Nineteenth-Century Japan*, Brill 2015, pp. 321–347.

●その他の執筆活動

「他者の痛み、寄り添おう 水戸出身の宗教学者磯前順一氏」『朝日新聞』(茨城版・朝刊) 二〇一五年一〇月九日

「論 人文学の死、震災と学問—人文学とは何か本質的議論を」『中外日報』二〇一五年一〇月二三日

「巡礼人生」(連載 月一回掲載)『朝日新聞』(茨城版・朝刊) 二〇一五年一月二八日〜現在

「戦後日本社会と植民地主義国家」三元社編集部編『竹村民郎著作集完結記念論集』三元社 二〇一五年二月 一五一〜一五五頁

「虚空を映し出す大きな瞳——一九七〇年代の沢田研二論」『日文研』五六号 二〇一六年三月 一一〜一八頁

伊東貴之

●著書

『「心身／身心」と環境の哲学——東アジアの伝統思想を媒介に考える——』(編著) 汲古書院 二〇一六年三月 八一八頁

『思想史から東アジアを考える』(辻本雅史・徐興慶編、共著) 日本学研究叢書21 國立臺灣大學出版中心 二〇一六年三月 三三〇頁

●論文

『「心」と「身体」、『人間の本性』に関する試論——新儒教における哲学的概念の再検討を通じて』『「心身／身心」と環境の哲学——東アジアの伝統思想を媒介に考える』汲古書院 二〇一六年三月 三二七〜三五二頁

「東アジアの『近世』から中国の『近代』へ——比較史と文化交流史／交渉史の視点による一考察——」(辻本雅史、徐興慶編、共著)『思想史から東アジアを考える』日本学研究叢書21 國立臺灣大學出版中心 二〇一六年三月 一三〜五九頁

“Textual criticism and exegesis in East Asia and the West: A comparative study.” 2. “The reassessment of the Qing scholarship and the Bakumatsu empiricism” Eiji Takemura, Takayuki Ito, Hiroyuki Eto 『21世紀アジア学研究』第14号 国士舘大学21世紀アジア学会 二〇一六年三月 一一〜一二六頁

●その他の執筆活動

「台湾発、『文学』の贈り物——欧米の中国学の翻訳・紹介も進む」『図書新聞』第三二三五号 二〇一五年二月一九日

「昭和モダニズムの気骨と火花——『竹村民郎著作集』の公刊に寄せて」三元社編集部編『竹村民郎著作集完結記念論集』三元社 二〇一五年 一二月 一七八〜一八二頁

「はじめに——日文研・共同研究会と本論集の趣旨——」i〜iv、「附録…読者のための参考文献一覧」五〜二八頁「あとがき(共同研究会の開

催記録一覧を含む」七五五～七七二頁 『心身／身心』と環境の哲学——東アジアの伝統思想を媒介に考える』汲古書院 二〇一六年三月

稲賀繁美

●著書

『接触造形論——触れあう魂、紡がれる形』名古屋大学出版会 二〇一六年二月二九日 四八四頁

●論文

「グローバル・スタンダードの功罪——海賊史観、帝国史観、輪廻転生史観にむけて」『美術フォーラム21』第三二号（特集：グローバルイズムの方法論と日本美術史研究——国主義と受容研究を越えて） 二〇一五年一月三〇日 二九～三四頁

“Between Revolutionary and Oriental Sage: Paul Cézanne in Japan,” *Japan Review* No. 28, International Research Center for Japanese Studies, 2015, pp. 133–172.

“A ‘Pirates’ View’ of Art History,” *Review of Japanese Culture and Society*, vol. XXVI, Josai University, December 2014 (sic: 2016), pp. 65–79.

「世界制覇の夢と離散状況と『日本およびアジア地域におけるグローバル・アートとディアスポラ・アート』より（前）」『あいだ』二二二号（連載一一一） 二〇一六年一月二〇日 二四～二九頁、「（後）」『あいだ』二二三号（連載一二二） 二〇一六年二月二〇日 三七～四四頁

「移ろいゆく形、うけつがれる生命…伊勢神宮の遷宮を迎えて」『霊性と東西文明——日本とフランス「ルーツとルーツ」対話』勉強出版 二〇一六年三月 三三、一二一～一四二、一六二、三八二頁

「日本趣味から中世趣味へ…東洋美学の形成と近代都市文化の危機意識」『都市の近代化と現代文化：ブラジル・日本の対話から』アンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマ、ハケル・アビサツマラ、ムリロ・ジャルデリノ・ダコスタ編 CLAS Discussion Paper No. 61 京都大学地域研究統合情報センター 二〇一六年三月 二九～三五頁

「日本美術における猿 申年も立春を迎えるころに」『あいだ』二二四号（連載一一三） 二〇一六年三月二〇日 二六～三一頁
「全球的な知覚から近代性を問い直す…モダニティを振り返って再定義し、デジタル化されたグローバル尺度モデルを修正する」『第2日…登壇者によるパネルディスカッション』『美術館はいかにグローバルになれるのか？ How Global Can Museums Be?』CiMAM（国際美術館会

議)二〇一五年次総会東京大会実行委員会(事務局・森美術館) 二〇一六年三月二五日 九〇〜一〇七頁、一四五〜一六六頁

「ジャポニスムと琳派・装飾再考『うつり』と『うつし』の観点から——ルイ・ゴンス、ロジェ・マルクス、エミール・ガレ、クロード・モネの周辺——石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編『大手前大学比較文化研究叢書12・江戸文化が甦る——トロニコワ・コレクシヨンで読み解く琳派から溝口健二まで』《Japonisme et École Rimpai: autour de Louis Gonse, Théodore Duret, Ninagawa Noritane, S. Bing, Roger Marx et Claude Monet》Édo retrouvée : La collection Tronquois, miroir des arts du Japon, de Rimpai à Mizoguchi 思文閣出版 二〇一六年三月二一日 一二三〜一五三頁、三一一〜三三二頁

●その他の執筆活動

「ビーヴァーのダム——『境界を越えた知識伝播』をめぐる統合的接近法 ゲッティンゲンの会議から(1)」『図書新聞』三二二八号(連載一五五) 二〇一五年一〇月三一日

「『談合』と『根回し』の復権——知の技法におけるニッチと、異文化伝達における暗黙の次元・再考 ゲッティンゲンの会議から(2)」『図書新聞』三二二九号(連載一五六) 二〇一五年一一月七日

「『器と中身』モデルから布状組織による転写モデルへ——知識の移転をめぐる異分野交流の実験より——ゲッティンゲンの会議から(3)」『図書新聞』三二三〇号(連載一五七) 二〇一五年一一月一四日

「交易港・大連の一九二五年——『一九二五年中国東北部で開催された大連勸業博覧会の歴史的考察：視聴化された満蒙』(2008)」三元社編集部編『竹村民郎著作集完結記念論集』三元社 二〇一五年一二月 四一〜四四頁

「終章——対話・等価性・虚無の天空」末本文美士編『比較思想から見た日本仏教』山喜房佛書林 二〇一五年一二月二八日 五三九〜五四七頁
「Spirituality 霊性という言葉について——東西宗教対話の概念史的基礎づけのために」『図書新聞』三二二九号(連載一五八) 二〇一六年一月二三日

「紅茶と緑茶の争いのさなかに——岡倉天心『茶の本』再考・蛇足」『図書新聞』三二四三号(連載一五九) 二〇一六年二月二〇日
「ポッティチェルリの《春》…神は細部に宿る——矢代幸雄の部分拡大写真の起源と伝播」『図書新聞』三二四四号(連載一六〇) 二〇一六年二月二七日

「武良家の人々にまつわる私的回想——死後の世界と揺蕩う魂」『図書新聞』三二四六号（連載一六一）二〇一六年三月一二日
 「制度の綻び目・通説の自堕落を追撃する『海賊史観』——竹村民郎著作集完結記念論文集刊行によせて」『図書新聞』三二四七号（連載一六二）二〇一六年三月一九日

「マエストロの光芒——ウンベルト・エーコの思い出」『図書新聞』三二四八号（連載一六三）二〇一六年三月二六日

井上 章一

●著書

『愛の空間——男と女はどこで結ばれてきたのか』角川ソフィア文庫 二〇一五年一〇月 三五五頁

●その他の執筆活動

「私だけの紅葉名所」『サライ』二〇一五年一〇月号

「書評 大江千里著『9番目の音を探して——47歳からのニューヨークジャズ留学』（再録）」『KADOKAWAパンフレット』二〇一五年一〇月

「書評 高野秀行・清水克行著『世界の辺境とハードボイルド室町時代』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一五年一〇月一日
 「座談 文化の力（永田紅らと）」『読売新聞』二〇一五年一〇月七日

“Kyoto e Kamakura—a narrativa de duas cidades na história do Japão,” *Modernização urbana e cultura contemporânea : diálogos Brasil – Japão*, Andrea

Yuri, Flores Urushima, Raquel Abi-Sâmara, Murilo Jardimino da Costa organização, Terracota, October 2015

「コンパニオンが女看守とよばれたころ——博覧会場における女性接遇員の成立と展開——」佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版 二〇一五年一〇月一七日

「書評 中山康樹著『ウィントン・マルサリスは本当にジャズを殺したのか?』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一五年一〇月二二日
 「すまいと日本人」『週刊現代』二〇一五年一〇月三二日

「ブラジルのホステス(?)さん」『ブラジルト報』二〇一五年一二月号

- 「掲示板 ピアノと講演のご用命を」『週刊新潮』二〇一五年一月五日号
- 「試験問題 ゆたかな番組をささえるもの（平成二七年度日本留学試験第二回）」二〇一五年一月八日実施
- 「書評 金沢百枝著『ロマネスク美術革命』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一五年一月一二日
- 「座談 まちのかたち（砂原庸介らと）」『読売新聞』二〇一五年一月二五日
- 「書評 中村美知夫著『サル学』の系譜」『週刊ポスト』二〇一五年一月二七日、一月四日号
- 「対談 日本人の忘れもの知恵会議（通崎睦美と）」『京都新聞』二〇一五年一月二九日
- 「書評 関雄二著『古代文明アンデスと西アジア神殿と権力の生成』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一五年一月三日
- 「書評 貞包英之著『消費は誘惑する 遊郭・白米・変化朝顔』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一五年一月二四日
- 「『国民のための歴史学』を考える——竹村民郎著作集から」三元社編集部編『竹村民郎著作集完結記念論集』三元社 二〇一五年一月
- 「回顧二〇一五 私の三冊」『日本経済新聞』二〇一五年一月二七日
- 「春画への接近をはばむもの」『ユリイカ』二〇一六年一月臨時増刊号
- 「『怪しいものたちの中世』を読む」『本の旅人』二〇一六年一月号
- 「『村の掟』をのりこえる圧倒的な自由」『週刊ポスト』二〇一六年一月八日
- 「解説 ややゆがんだ一文になってしまったのには、理由がある。」東海林さだお『さらば東京タワー』文春文庫 二〇一六年一月一〇日
- 「時代の流れ、社会の動きを文学の形で捉える」『遼』五八号 二〇一六年一月二〇日
- 「書評 アン・ヴァン・ディーンデレン、ディディエ・ヴォルカールト編著『誰がネロとパトラッシュを殺すのか』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年一月二二日
- 「対談 歴史対談、東と西——やはり、日本に古代はなかった（保立道久と）」『HUMAN』vol.08 二〇一六年一月二二日
- 「縮むまちを恐れるな」『読売新聞』二〇一六年一月三一日
- 「寺に寝泊まりした人々」『建築と社会』二〇一六年二月号
- 「ただのエキゾチシズムではない日本の美点」『SAPIO』二〇一六年二月号

- 「試験問題 京都ぎらい（平成二八年度就実短期大学入学試験）」二〇一六年二月一日実施
- 「インタビュー 観光客増も一長一短」『京都新聞』（朝刊）二〇一六年二月二日
- 「書評 ジラルデッリ青木美由紀著『明治の建築家・伊東忠太 オスマン帝国をゆく』」『週刊ポスト』二〇一六年二月五日号
- 「書評 中川右介著『オリンピアと嘆きの天使 ヒトラーと映画女優たち』」『週刊現代』二〇一六年二月六日
- 「インタビュー 洛中人の熾烈な『いけず』 古都千年で積もった毒を書く」『アエラ』二〇一六年二月一五日号
- 「いわゆる『チラリズム』に（い）」『Fashion Talks...』一号 二〇一六年二月一五日
- 「書評 松木武彦著『美の考古学』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年二月一八日
- 「京都人のあしらいぶり」『文藝春秋』二〇一六年三月特別号
- 「洛中洛外愛憎の図」『望星』二〇一六年三月号
- 「大阪の人なのに——私は『この国のかたち』をこう読んだ」『文藝春秋』二〇一六年三月特別増刊号
- 「対談 俳句と官能（井上曜子と）」『季刊船団』第一〇八号 二〇一六年三月一日
- 「特集 二〇一六新書大賞 大賞受賞者インタビュー『京都ぎらい』」『中央公論』二〇一六年三月号
- 「目利き二八人が選ぶ二〇一五年私のオススメ新書」『中央公論』二〇一六年三月号
- 「インタビュー ほんとうに『京都ぎらい』なんですか？」『月刊京都』二〇一六年三月号
- 「書評 乃至政彦著『戦国の陣形』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年三月一〇日
- 「関西の館」①、② 御厨貴編『権力の館を考える』放送大学教育振興会 二〇一六年三月二〇日
- 「インタビュー 平均的大阪人論にモノ申す」『産経新聞』二〇一六年三月三〇日
- 「伊東忠太の妖怪世界」『怪』二〇一六年三月三〇日
- 「書評 小川隆夫著『ジャズメン、ジャズを聴く』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年三月三一日
- 「試験問題 つくられた桂離宮神話（二〇一六年度花園大学入学試験）」二〇一六年実施日不明

牛村 圭

●論文

「書くように話すに如くはなし」『琅』二九号 二〇一五年十月 八〇二二頁

榎本 渉

●論文

「中世東シナ海海域における国際商人」『学際』第一号 二〇一六年一月 三〇一三頁

大塚英志

●著書

『UNLUCKY YOUNG MEN 1』（仏語翻訳版）（藤原カムイと共著）Ki-on 二〇一五年一〇月 三六二頁

『御宅族』的精神史 1980年代論 北京大學出版社 二〇一五年一月 三四五頁

『MISHIMA BOYS』（仏語翻訳版）（西川聖蘭と共著）AKATA 二〇一六年一月 二四〇頁

『「おたく」の精神史 一九八〇年代論』星海社 二〇一六年三月 四九一頁

『UNLUCKY YOUNG MEN 2』（仏語翻訳版）（藤原カムイと共著）Ki-on 二〇一六年三月 三八六頁

●その他の執筆活動

「現代のことば」『京都新聞』（夕刊）二〇一五年一〇月九日

「恋する民俗学者」（中島千晴と共著）『ComicWalker』株式会社KADOKAWA 二〇一五年一〇月〜二〇一六年三月

「クウデタア2」（西川聖蘭と共著）『ComicWalker・大塚英志漫画』株式会社KADOKAWA 二〇一五年一〇月〜二〇一六年三月

「解題」『ジブリの教科書 11 ホーホケキョとなりの山田くん』文藝春秋 二〇一五年一月 一九七〜二一五頁

「対談 文学のリハビリテーション 商業主義とグローバリズム」（大澤聡と）『eプラス26』二〇一五年二月 太田出版 五二〜七二頁

「多重人格探偵サイコ」(田島昭宇と共著)『ヤングエース』二〇一五年一月号〜二〇一六年二月号 株式会社KADOKAWA

「黒鷲死体宅配便」(山崎峰水と共著)『ヤングエース』二〇一五年一月号〜二〇一六年二月号 株式会社KADOKAWA

「まんがでわかるまんがの歴史」(ひらりと共著)『ヤングエース』二〇一五年一月号〜二〇一六年三月号 株式会社KADOKAWA

「書評『週刊ポスト九月二五日・一〇月二日号』」『週刊ポスト』小学館 二〇一五年一月六日号

「現代のことば」『京都新聞』(夕刊) 二〇一五年二月一〇日

「ぼくとぬえちゃんの百一鬼夜行」(樹生ナトと共著)『少年エース』二〇一五年二月号〜二〇一六年三月号 株式会社KADOKAWA

「書評 FUJI OTSUKA×SEIRA NISHIKAWA『MISHIMA BOYS』」『週刊ポスト』小学館 二〇一六年一月八日号

「機能性文学論 更新後の文学」『atプラス27』太田出版 二〇一六年二月 九六〜一九頁

「書評 村上春樹著『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』」『週刊ポスト』小学館 二〇一六年二月五日号

「現代のことば」『京都新聞』(夕刊) 二〇一六年二月一〇日

「インタビュー 『憲法』を生き直す最後の機会」『早稲田文学』二〇一六年春号 筑摩書房 二〇一六年二月 一四一〜一四九頁

「アライアズキ、今宵も小豆を洗う。」(山崎峰水と共著)『ヤングエース』二〇一六年三月号 株式会社KADOKAWA

「書評 香山リカ著『リベラルですが、何か?』」『週刊ポスト』小学館 二〇一六年三月一八日号

郭 南燕

●著書

『志賀直哉で「世界文学」を読み解く』作品社 二〇一六年三月 二四六頁

楠 綾子

●論文

「国際交流基金の設立——日米関係の危機と日本外交の意識変容」福永文夫編『第二の「戦後」の形成過程——一九七〇年代における日本の政

治的・外交的再編』有斐閣 二〇一五年十二月 八九～一一八頁

●その他の執筆活動

「項目執筆 大東亜会議（一九四三年）、終戦工作（一九四五年）、ポツダム宣言受諾、降伏条約調印（一九四五年）、占領下の外務省と平和条約研究（一九四五～五一年）、朝鮮戦争と日本の再軍備（一九五〇年）」簗原俊洋、奈良岡聰智編著『ハンドブック近代日本外交史——黒船来港から占領期まで』ミネルヴァ書房 二〇一六年一月

「項目執筆 安保改定、カイロ宣言、再軍備（日本）、事前協議制度、サンフランシスコ講和条約、日米安全保障体制、ヤルタ会談」吉川元責任編集『平和と安全保障を考える事典』法律文化社 二〇一六年三月

「項目執筆 村山談話、河野談話、邦人テロ殺害事件、開発協力大綱」『イミダス』「外交」二〇一六年版

倉本一宏

●著書

『現代語訳小右記1 三代の蔵人頭』吉川弘文館 二〇一五年一〇月 三六八頁

『蘇我氏―古代豪族の興亡』中央公論新社 二〇一五年十二月 二七二頁

『大学の日本史 1. 古代』（共著）（「列島の形成から弥生社会へ」「倭王権の成立」「東アジアと倭国」「大王と地方豪族」「飛鳥の王権」）山川出版社 二〇一六年二月 一六～九二頁

●その他の執筆活動

「珠玉のことば」『NHKラジオ深夜便 日記手帳2016』二〇一五年一〇月

「著者からのメッセージ」『スミセイベストブック』二〇一五年一月号 一八～二〇頁

「思文閣出版思い出の一冊『陽明叢書 記録文書篇 御堂関白記』『日記・古記録の世界』『鴨東通信』一〇〇号 二〇一五年十二月 二四、三〇頁

「私のモチーフ 中公新書倉本一宏『蘇我氏』『週刊読書人』二〇一六年一月一日号 二頁

「蘇我氏はどこから来たのか―その実像と興亡を探る」『やまとみち』第二四四号 二〇一六年一月 九頁
 「項目執筆 記録文化財、名刹・名家・名跡、日記」『日本文化事典』丸善出版 二九六～二九七、三〇二～三〇三、三六八～三六九頁 二〇一六年一月

小松和彦

●著書

『日本の妖怪カード』（藍伽著、飯倉義之と共同監修）ヴィジヨナリー・カンパニー 二〇一五年一月二日 全四〇枚 解説書一〇二頁
 『妖怪マンガで楽しい古典』全五巻（監修）学研プラス 二〇一六年二月三日 各八〇頁

●その他の執筆活動

「巻頭寄稿 世界に誇る日本の妖怪文化」『季刊ジャネット』七五号 株式会社スリーエーネットワーク 二〇一五年一〇月二五日
 「二〇一五年度春季公開講演会講演録 見えない『もの』を描く―妖怪画の起源―」『大谷學報』第九五巻第一号 二〇一五年一〇月三〇日
 「日本の妖怪文化―その特徴と魅力―」『學士會会報』第九一五号 一般社団法人学士会 二〇一五年一月一日
 「見えない『もののけ』を描く―鬼・妖怪・幽霊をめぐって―」愛知学院大学禅研究所編『仏教の知恵 禅の世界』大法輪閣 二〇一五年一月一九日

「インタビュー 『文系』役に立つ？ 時間かけ新見地示す」『読売新聞』（夕刊）二〇一五年一月二五日

「水木しげるさんを悼む 現代の妖怪文化の先導者」『日本経済新聞』（朝刊）二〇一五年一月二日

「血を吸い脂を抜く妖怪―アンドレスのピシュタコと日本の鬼」『INACT Review 国立新美術館研究紀要』第二号 国立新美術館 二〇一五年一月一五日

「水木しげるさんを悼むへ3」妖怪画二つの源泉 〈小松和彦〉『山陰中央新報』二〇一五年二月二四日

「妖怪は歴史、文学、美術、芸能を横断 日本文化の特質『カワイイ』を表現」『京都新聞』二〇一六年一月一日

「言葉の遠近法 日本文化の『媒介者』」『公明新聞』二〇一六年一月二七日

「追悼水木しげるさん 豊かな妖怪文化蘇らせた」『西日本新聞』 二〇一六年一月二七日

「言葉の遠近法 水木しげるファンの心境」『公明新聞』 二〇一六年二月二四日

「妖怪から怪獣、そしてゴジラへ」天理大学考古学・民俗学研究室編『天理大学考古学・民俗学シリーズ2 モノと図像から探る妖怪・怪獣の誕生』 勉誠出版 二〇一六年三月二〇日

「言葉の遠近法 修二会と鬼追い」『公明新聞』 二〇一六年三月二三日

フレデリック・クレインス

●論文

「江戸期における物心二元論の流入と蘭学者の心身観」伊東貴之編『心身／身心』と環境の哲学―東アジアの伝統思想を媒介に考える』汲古書院 二〇一六年三月 三六九〜三八四頁

佐野真由子

●著書

『万国博覧会と人間の歴史』（編著） 思文閣出版 二〇一五年一〇月 七五八頁

●その他の執筆活動

“Book Review: *Commerce and Culture at the 1910 Japan-British Exhibition: Centenary Perspectives*, Edited by Ayako Hotta-Lister and Ian Nish,” *Japan Review*, No. 28, December 2015, pp. 261–262.

「グローバルとローカルから見る幕末明治」『日本歴史』第八一―号 二〇一五年十二月 一九〜二二頁

「文化と文化の出会いとところで」『京都華頂大学華頂短期大学学報』通巻第二〇号 二〇一六年三月 五〜二〇頁

瀧井一博

● 論文

「博覧と衆智―渡辺洪基と萬年会の目指したもの―」佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版 二〇一五年一〇月 四〇七～四二五頁

● その他の執筆活動

「政治学の古典を読む（一三）政治的『敵』概念の逆説（カール・シュミット著、田中浩・原田武雄訳『政治的なものの概念』未来社 一九七〇年）」『究』第五六号 ミネルヴァ書房 二〇一五年一月号 四四～四五頁

「『阪神間モダニズム再考』を読んで」三元社編集部編『竹村民郎著作集完結記念論集』三元社 二〇一五年十二月 一三九～一四一頁

“Book Review: *Failed Democratization in Prewar Japan: Breakdown of a Hybrid Regime*, written by Harukata Takenaka, Stanford: Stanford University Press, 2014.” *Social Science Japan Journal*, 19(1), 2016, pp. 99–101

「政治学の古典を読む（一四）文明という敵（サミュエル・ハンチントン著、鈴木主税訳『文明の衝突』集英社 一九九八年）」『究』第五九号 ミネルヴァ書房 二〇一六年二月号 四四～四五頁

坪井秀人

● 著書

（編・共著）*Wort-Bild-Assimilationen: Japan und die Moderne*, Berlin: Gebr. Mann Verlag, Simone Müller, Itō Tōru, Robin Rehm, March 2016, 256 pages.

● 論文

「二十世紀日本語詩を思い出す」『現代詩手帖』思潮社（連載中） 第五八卷一〇号（連載第七）二〇一五年一〇月 一四八～一五七頁、第五八卷一一号（連載第八）二〇一五年一月 一三八～一四七頁、第五八卷一二号（連載第九）二〇一五年二月 一三八～一四四頁、第五九卷一号（連載第一〇）二〇一六年一月 一三六～一四二頁、第五九卷二号（連載第一一）二〇一六年二月 一三六～一四三頁、第五九卷三号

(連載第二二) 二〇一六年三月 一三二～一三八頁

●その他の執筆活動

「項目執筆 大東亜文学者大会、日本文学報国会、日本浪漫派、大日本歌人協会、辻詩集、安西冬衛、細雪」『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館 二〇一五年一〇月

ジョン・ブリン

●論文

“Undermining the myths: Habian’s Shintō critique,” James Baskind and Richard Bowring eds. *The Myōtei dialogues: a Japanese Christian critique of native traditions*, Brill, 2015, pp. 36–42.

「近代の宮中儀礼：天皇に求められた政治」明治維新史学会編『講座明治維新11—明治維新と宗教・文化』有志舎 二〇一六年三月

●その他の執筆活動

「問題提起：これまでの歴史をふりかえって」『キリスト教と神道との対話—二つの宗教が探る強調への道筋』NPO法人神道国際学会 二〇一五年十一月 一七～二二頁

“On Shintō,” James Baskind and Richard Bowring eds. *The Myōtei dialogues: a Japanese Christian critique of native traditions*, Brill, 2015, pp. 147–165.

「Japan Review 三〇号をむかえて（その一）」『日文研』五六号 二〇一六年三月 五〇～五二頁

“Yasukuni (Tokyo shrine to the Japanese military war dead),” John Stone et al. eds., *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Race, Ethnicity, and Nationalism*, Wiley Blackwell, 2016

細川周平

●論文

「戦前日本のルンバ略史」『現代風俗学研究』第一六号 二〇一五年 三～一二頁

“A literature moderna dos imigrantes japoneses nos folhetins de jornais entre 1920 e 1930” (translation by Yuko Takeda P. de Arruda), Andrea Yuri Flores Urushima, Raquel Abi-Samara & Murilo Jardelino da Costa, eds. *Modernização Urbana e Cultura Contemporânea: Diálogos Brasil-Japão*, Terracota, São Paulo, 2015, pp. 43–68

“Key Tunes at the Heart of Japan’s Jazz Age: Americanism and its Indigenization,” *Situations*, vol. 9 No. 1, 2016, pp. 49–64

「日系ブラジル文学のモダニズム」『都市の近代化と現代文化ーブラジル・日本の対話から』アンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマ、ハケル・アビサツマラ、ムリロ・ジャルデリノ・ダコスタ編 CIAS Discussion Paper No. 61 京都大学地域研究統合情報センター 二〇一六年三月 二二～二八頁

●その他の執筆活動

「書評 いのちの始まりの寓話 いしいしんじ著『悪声』『新潮』二〇一五年一〇月号 二八八～二八九頁

「達者で もったいない語辞典」『読売新聞』（夕刊） 二〇一五年一〇月二日

「書評 松村洋著『日本鉄道歌謡史 全二巻』みず書房」『パブリッシャーズ・レビュー』第四一号 二〇一五年十二月五日 三頁

「阪神間モダニズムの片隅に生きてー家族の肖像」三元社編集部編『竹村民郎著作集完結記念論集』三元社 二〇一五年十二月 一〇九～一一二頁

「近況報告」『ブラジル俳文学』三七九号 二〇一五年十二月 三二頁

「達者で」『ふろんていら』四七号 二〇一五年十二月 七頁

「CD解説 ウニタ・ミニマ『世界の縁（へり）』」二〇一六年一月

「CD解説 修業時代の服部良一」『ニッポンジャズ水滸伝 人之巻』二〇一六年二月 五九～六二頁

「ブラジル日系文学五〇年の筆跡」『ブラジル日系文学』第五二号 二〇一六年三月 一五～一六頁

“Japan Meets the Boss of the Blues”. *The Common Reader. A Journal of the Essay*, Washington University in St. Louis, vol. 1/1, 2016, pp. 87–99

松田利彦

● 論文

“Les KEMPEITAI et l'expansion du Japon impérial à Taiwan, en Corée et en Chine au début du XXe siècle,” Arnaud Houte et Jean-Noël Luc eds., *Les Gendarmeries dans le monde, de la Révolution française à nos jours*, Paris: Presses universitaires Paris Sorbonne, February 2016, pp. 267-282

森 洋久

● 著書

『増補改訂 森幸安の描いた地図』日文研叢書54（辻垣晃一と共編著）臨川書店 二〇一六年三月 四六四頁

山田奨治

● 論文

「解題『パクリ経済』を読んで」カル・ラウスティアラ、クリストファー・スプリグマン（山形浩生、森本正史訳）『パクリ経済 コピーはイノベーションを刺激する』みず書房 二〇一五年一月 三五―三五六頁

「『誤読』される禅」『美術手帖』二〇一六年一月号 一〇六―一一五頁

● その他の執筆活動

「インタビュー 五輪エンブレム問題の教訓は——パクリは絶対悪ならず」『京都新聞』（朝刊）二〇一五年十二月五日

「コメント オリジナル？（2）エンブレム 業界と社会『常識』にズレ」『朝日新聞』（朝刊）二〇一六年一月五日

「インタビュー 『嫌儲』が非難の境目」『朝日新聞』（デジタル版）二〇一六年一月五日

「インタビュー オープンアクセス・ポリシー事情」『月刊DRF』第七四号 二〇一六年三月

マルクス・リュッターマン

● 論文

“Von Koshoro an Oma. Anmerkungen zum Kindlichen an Gestalt und Funktion ein es japanischsprachigen Briefleins aus Uebersee (17. Jh.),” in: Michael Kinski, Harald Salomon, Eike Grossmann (ed.), Geschichte der Kindheit und der Kindhe itsbilder in Japan. Eine Einfuehrung, Wiesbaden: Harrassowitz 2015, pp. 191-213. 「こしよろのカナぶみ——書状に反映している近世の幼児性について（子供の教育とじやがたらぶみとの関連を明らかにした文書および記録の分析・解釈）独語論文集『日本史における幼時そのものおよびその表彰』中」二〇一五年十二月

● その他の執筆活動

「国際社会のアキレス腱——『廃娼運動』とユディトたちの今後」三元社編集部編『竹村民郎著作集完結記念論集』三元社 三三〇三六頁
二〇一五年十二月

劉 建輝

● 論文

「『満洲』幻想の生成とその消滅」荻部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎編『日本思想史講座5—方法』ぺりかん社 二〇一五年十二月

「馬礼遜的『英華字典』編纂与一九世紀初在華新教傳教士的文化活動」（傳曉との共著）東北師範大学日本研究所・外国語学院編『外国問題研究』第二一八期 二〇一五年十二月

「見られる『日本』から見る『日本』——日文研所蔵『外地』関連絵葉書について」『HUMAN』vol.08 平凡社 二〇一六年一月

● その他の執筆活動

「帝国の光と闇への探求——『竹村民郎著作集I〜V』を読んで感じたこと」三元社編集部編『竹村民郎著作集完結記念論集』三元社 二〇一五年十二月

日文研 五十七号

二〇一六（平成二八）年九月三〇日発行

編集 細川周平、石川 肇、矢田部恵子

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒 610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五—二二二二

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



NICHIBUNKEN

ISSN 0915-0889